

93↑



文学女子に食べられる

女性優位
徹底責められ

サークルひまわりのたね 種乃なかみ

文学女子に食べられる 5

大学生にもなって童貞だった僕は、文学サークルの後輩女子に襲われ、犯され、告白されて、想像もしていなかった形で人生初めての恋人ができました。

彼女はいつも無口無表情で本ばかり読んでいて、何を考えているのか分からず、周囲から距離を置かれているような子だけれど、僕にとってはその得体の知れなさに心奪われ密かに惹かれていました。

大学の文学サークルで、
気になっている後輩女子がいる。

いつも殆ど口を開かず俯いていて
何を考えているのかわからない。

あまりに無口無反応で影が薄く、
空気のようにになっている後輩の女子...

僕も影が薄く、
皆の輪に溶け込めないまま
年も経ってしまい、
サークル室で本ばかり読んでいた。

寂れた文学サークルでさえも友達ができず、
孤立して本ばかり読んでいる僕達三人。
そんなはぐれ者の二人がこのような関係になったのは
自然な事だったのかもしれない。

先輩が私のこと...
オカズにしていること...

ああああっ
女の子に犯されてるっ
全身で犯されてるっ
全部犯されてるっ

僕への強い愛を抱いてくれた彼女は、
性愛の面でも非常に貪欲でした。

彼女に何度も何度も襲われ犯され愛されていくうちに、
すっかり身も心も彼女の虜にされてしまった僕は…

もう…

帰らせない……

え……？

先輩……

私……

もう……

限界
なんです……

もっと一緒に
いたい……

ずっとずっと
一緒に……

今日から一緒に……

ここで……
暮らしましょう……。

付き合い始めて約半年間経った頃、彼女の強引な誘いにより、
彼女の借りている一人暮らしの部屋に大切に閉じ込められるかのように
心を完全に束縛され、同棲する事になりました……。

同棲が始まってから一週間。

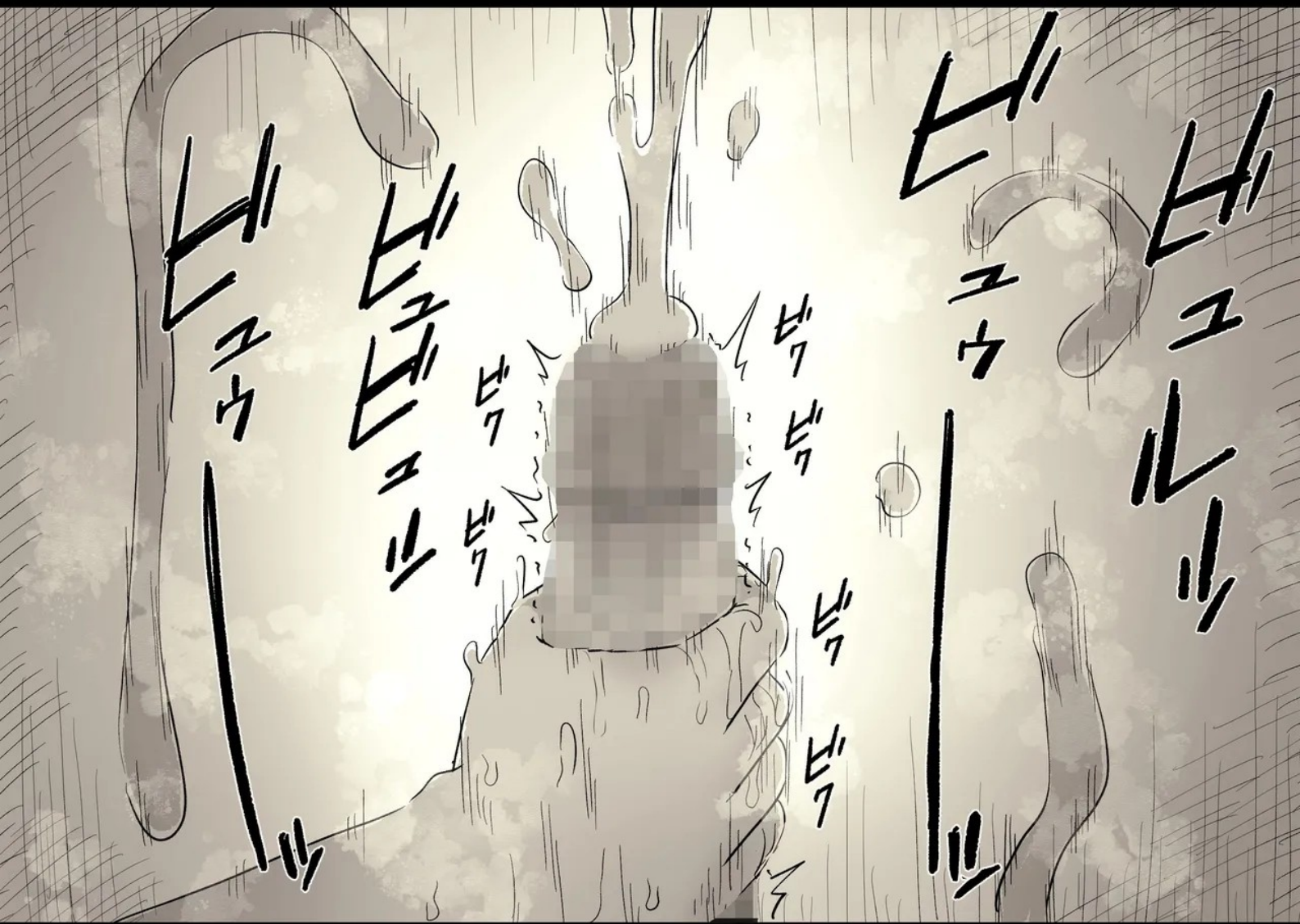
僕は、彼女に毎日のように、朝も昼も夜も…

一日中、何度も犯されて愛されています…。



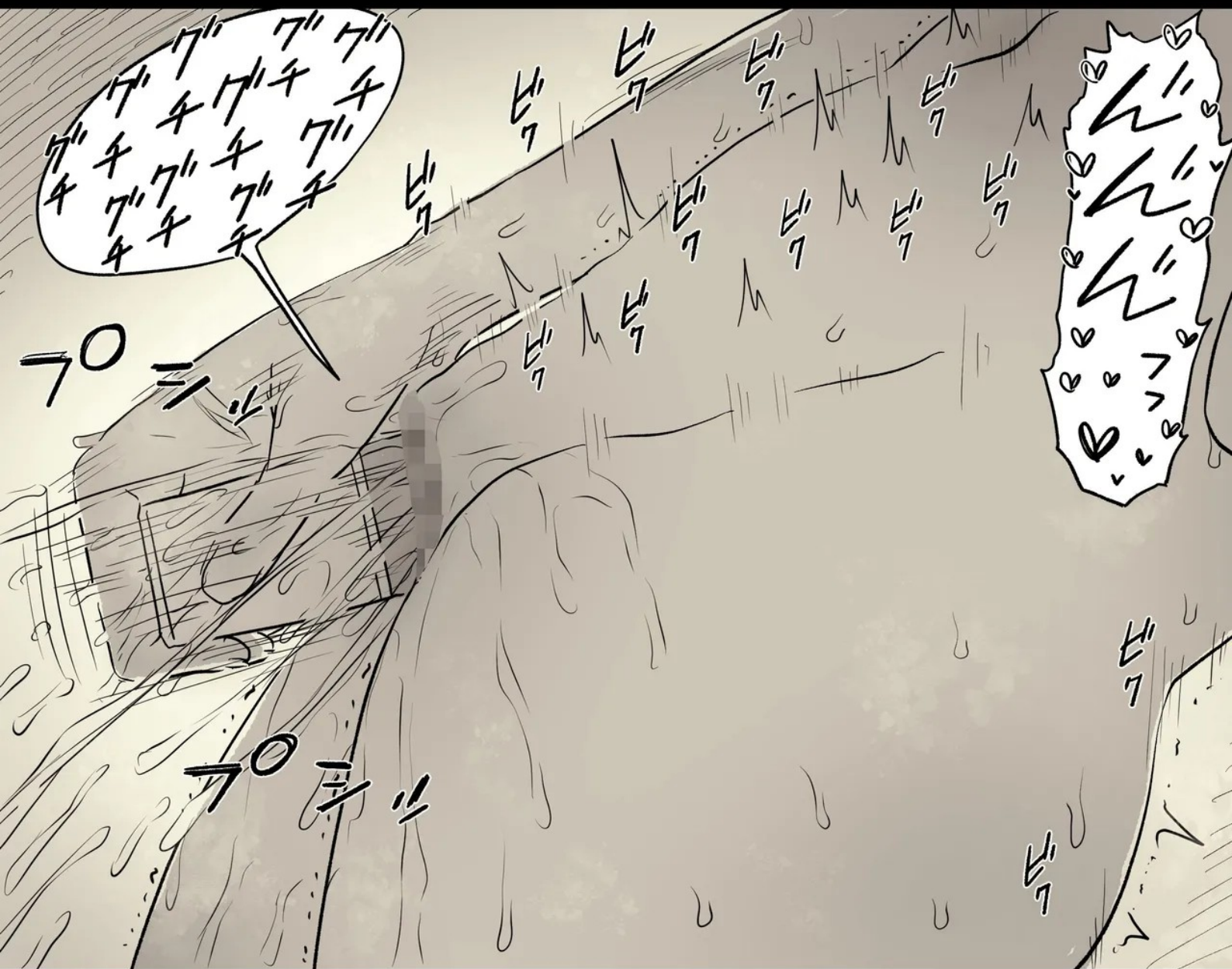
今日も指で前立腺を弄られながら、陰茎を手でしごかれながら、キスされながら、
僕の方がっている表情を堪能するようにじっと見つめられながら、
彼女自身もデイルドで自慰しながら……
いっぱいっいっぱい愛されています……

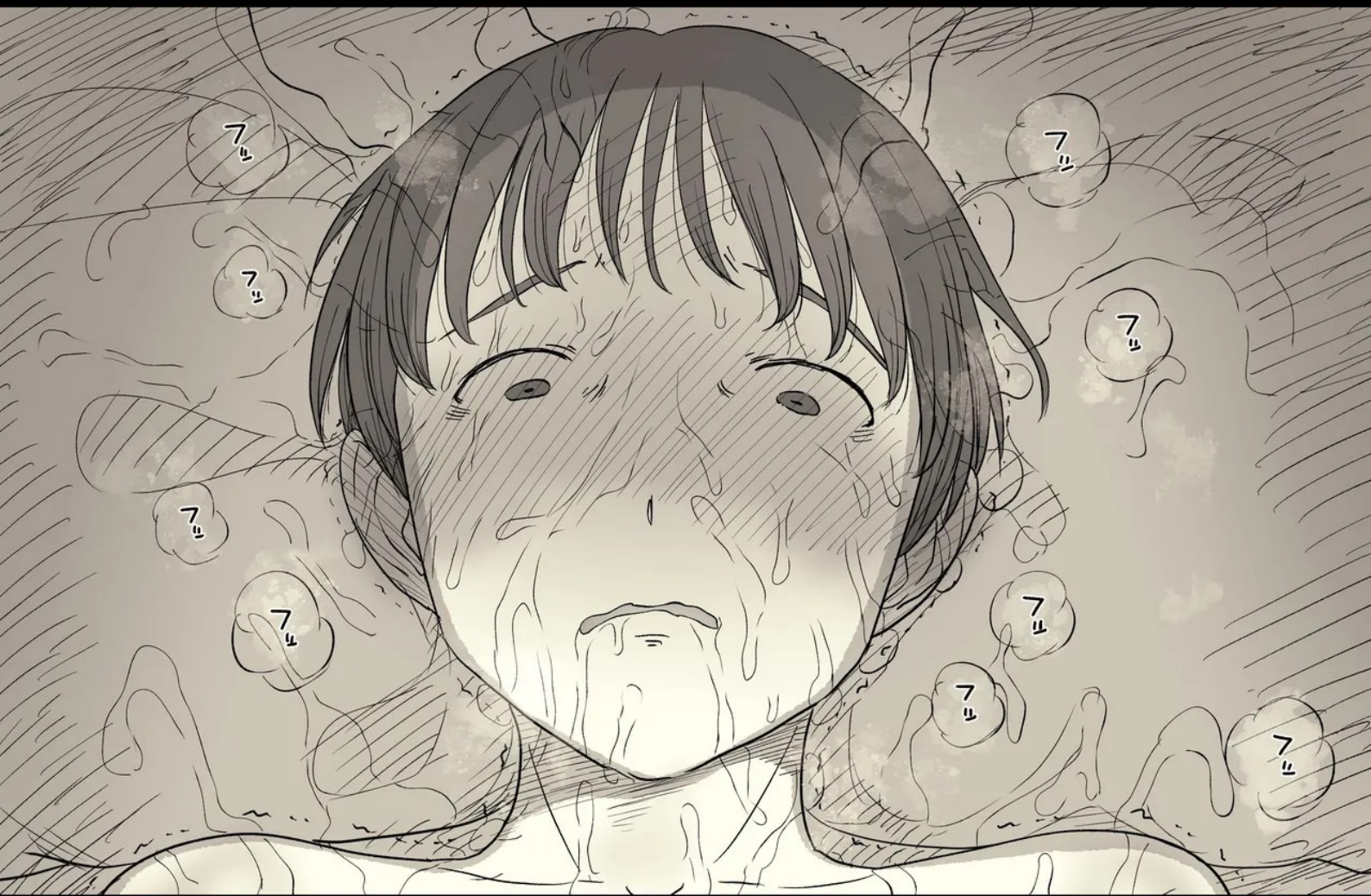


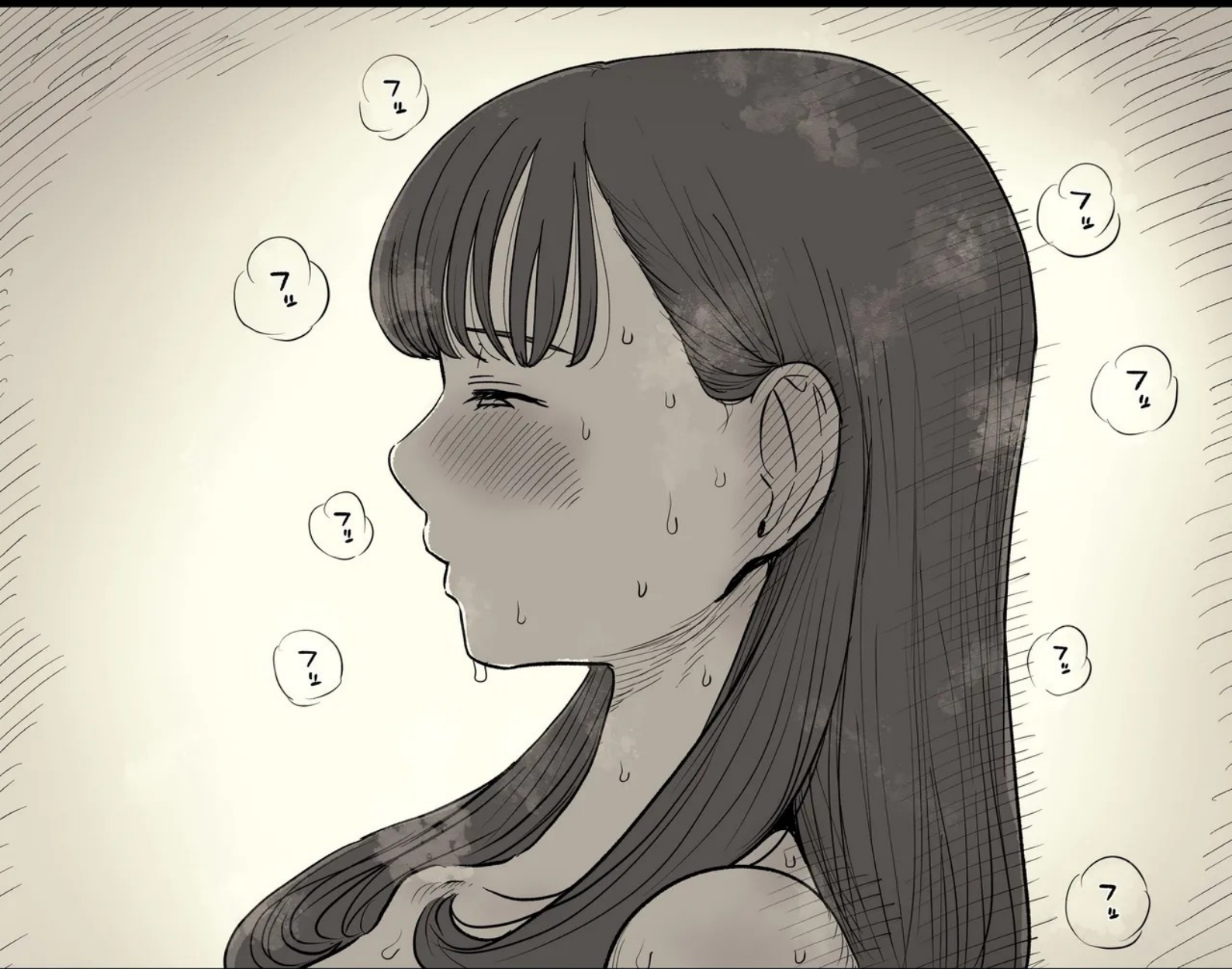








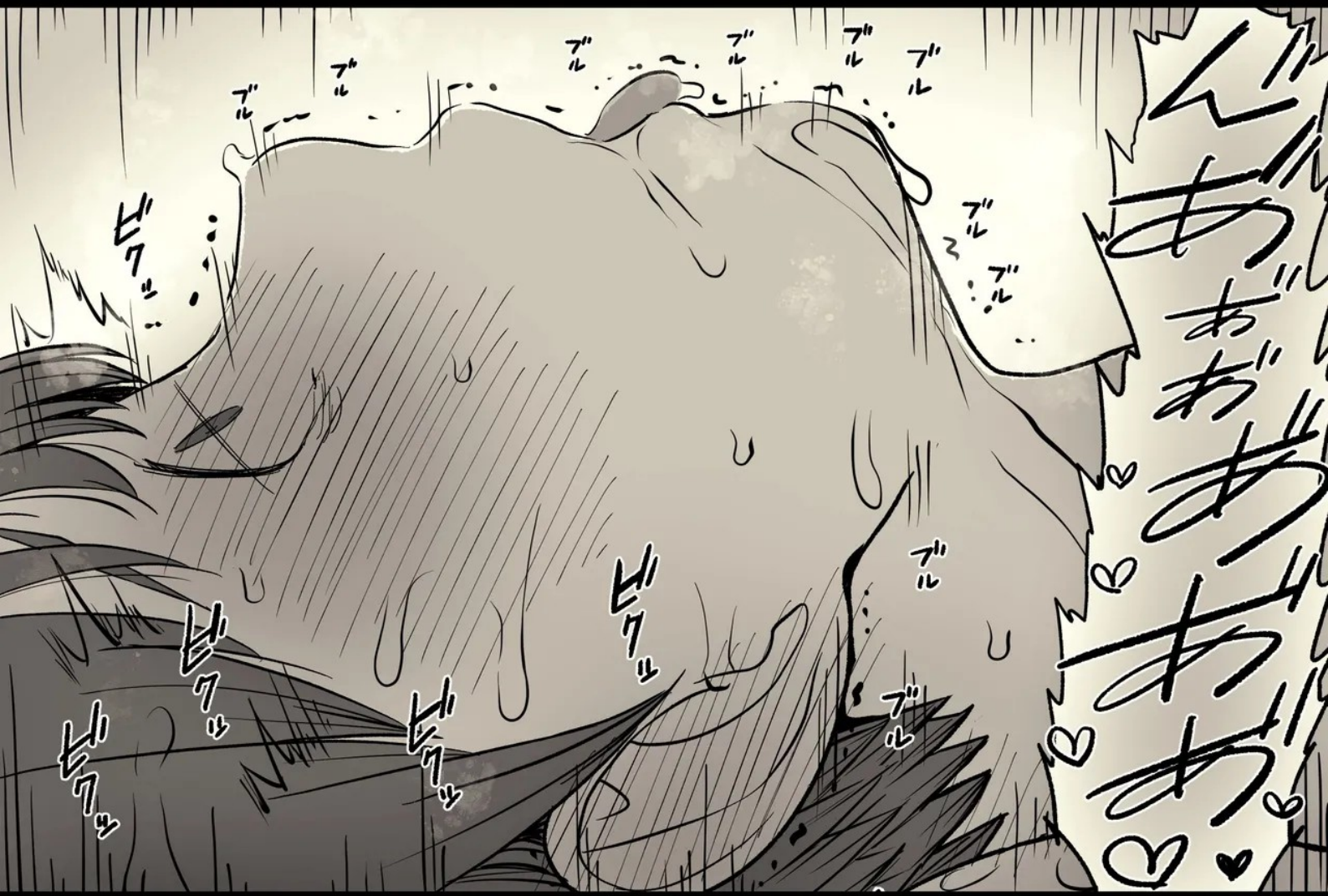






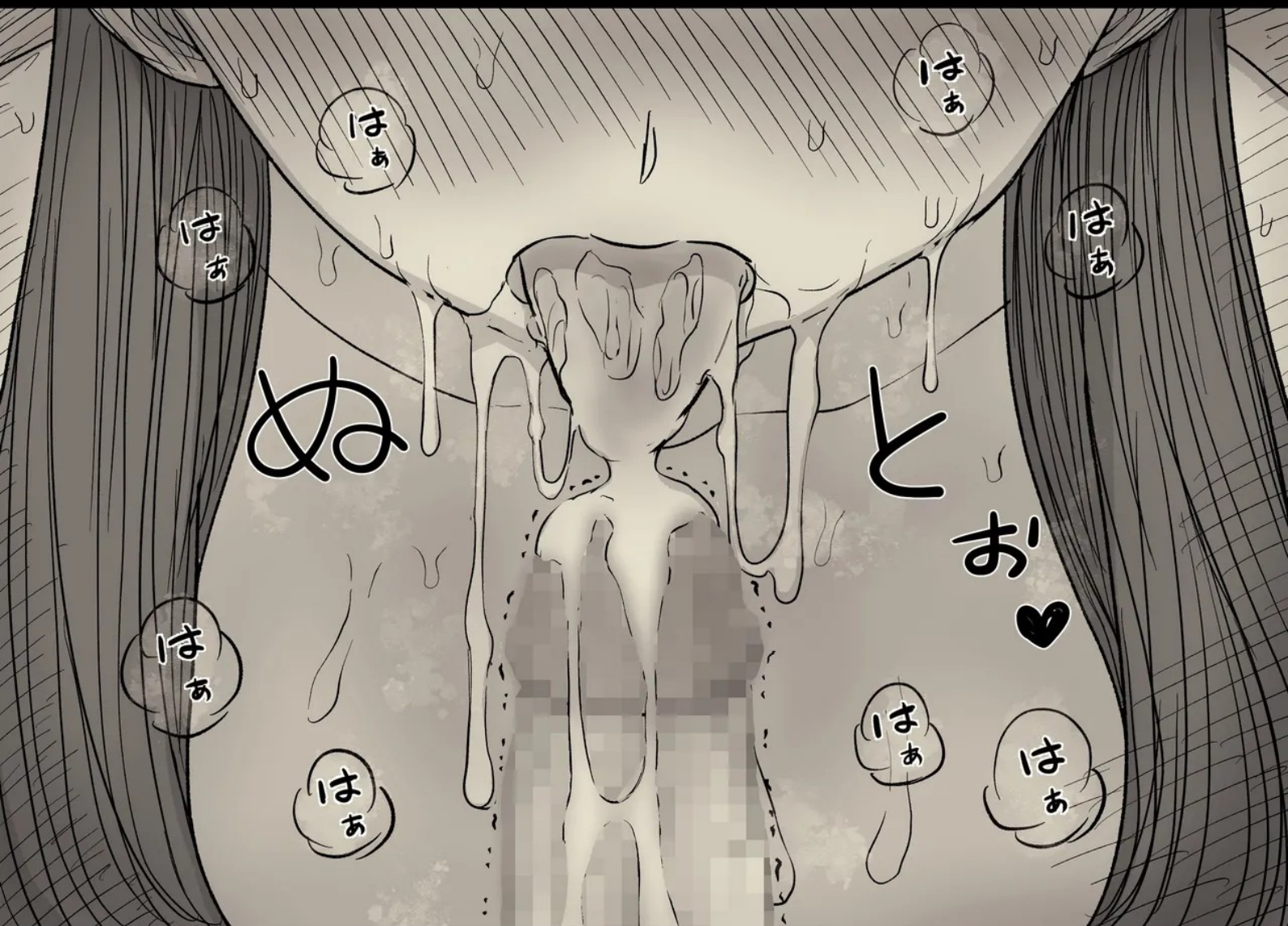
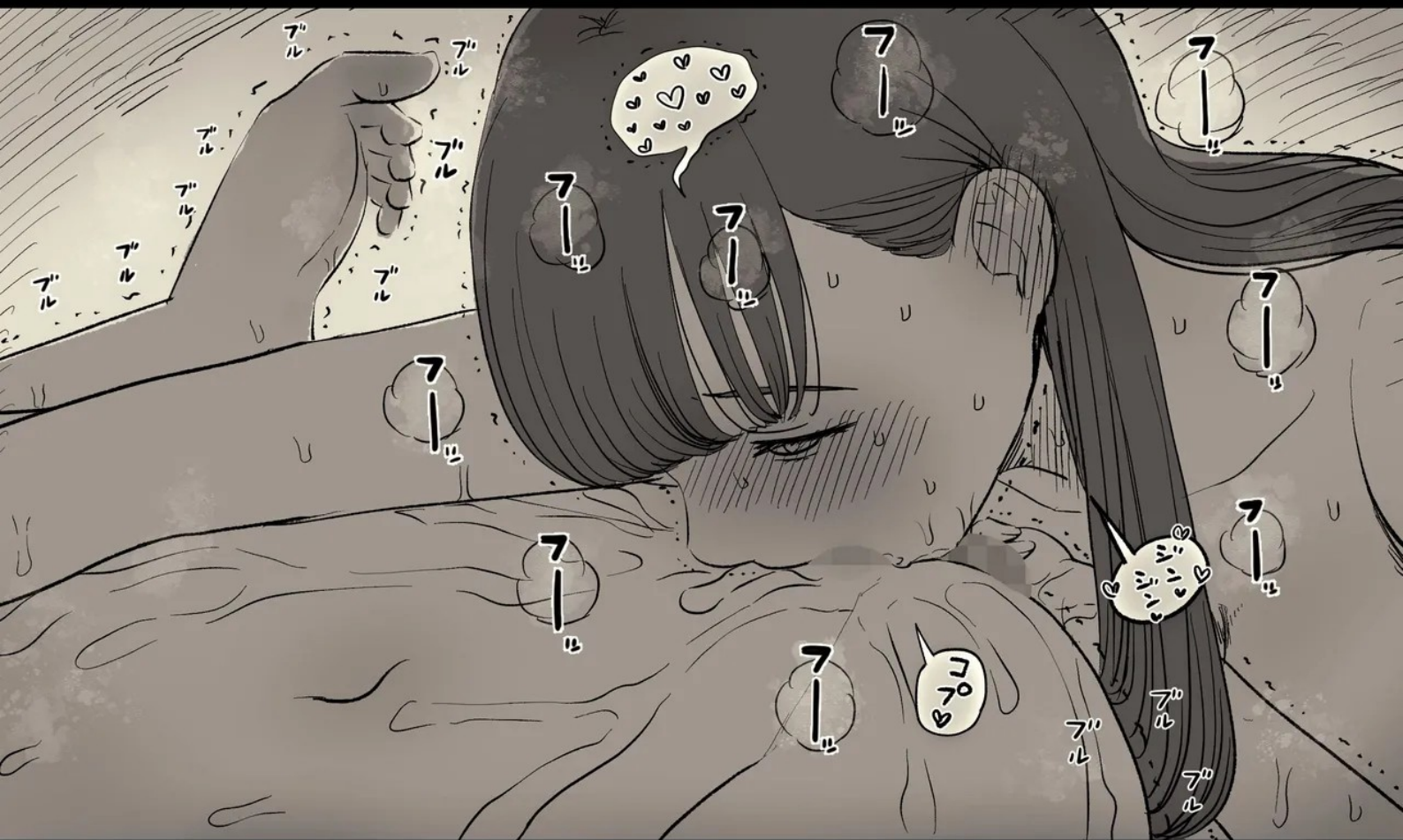
彼女はまた、僕の前立腺と…乳首も一緒に責めながら…
僕の陰茎を愛おしそうに喉の奥まで飲み込んで食べて…

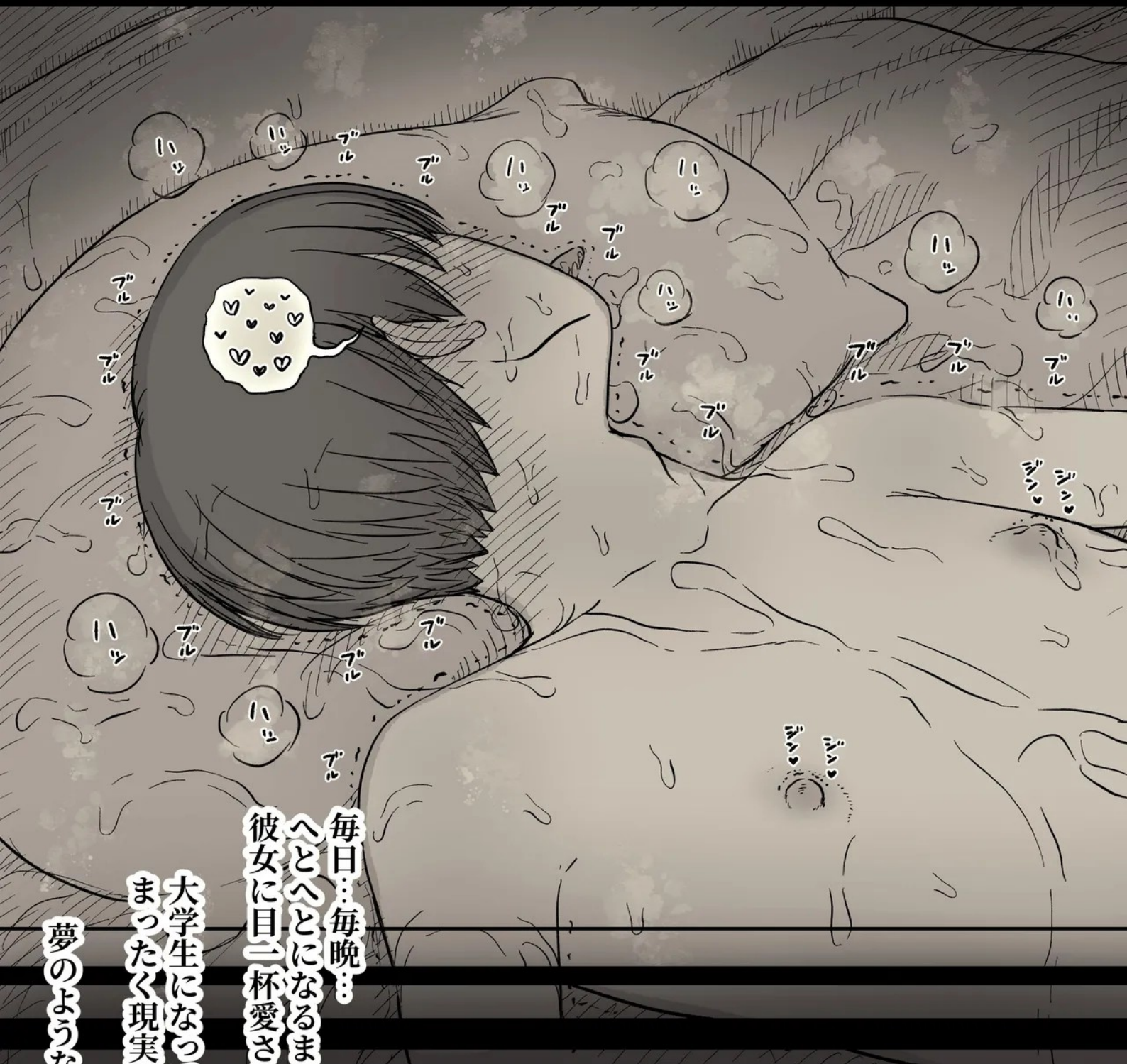






彼女は喉奥に射精された精子を
美味しそうに一滴残らず飲み干して……





毎日：毎晩：

へとへとになるまで

彼女に目一杯愛され、可愛がられるという...

大学生になっても童貞だった僕にとっては、
まったく現実感が無いほどの...

夢のような同棲生活が始まりました.....。

彼女の愛情は、一般的にみると少し重く…いや…かなり重い方なのかもしれません…。

でも…人と馴染めず人の温もりに飢えていた僕にとっては、彼女の重いほどの愛情が…それがとても幸せで…僕の心を捕らえて離しません…。

食事を摂る時、

彼女は僕に自分で食べる事を禁止し、全て彼女の手で食べさせてきます。毎日、朝晩、必ず、全部、彼女の手で食べさせてきます。

もぐもぐと食べる僕を愛おしそうにじっと見つめながら、食べさせてきます。

「今日もちゃんと食べられたの。いい子ね。口に合わない食べ物があったら、ちゃんと言うのよ。」



彼女に排出物も
全てチェックさせなさいと言われ…

毎回トイレに行くたびに彼女が付いてきます…。

「自分で拭いちゃダメ。私がしてあげるから。」
「私にさせなさい。」
「いい子ね。」



全てを見られて、排出後のお尻まで拭かれて、
恥ずかしさで勃起してしまった時も、
その場で抜いて沈めてくれます。

かわいい…

じゅ…

むく…



ぐっくん♡

彼女は僕の食事からシモの全てまでお世話したがり、
それをさせる事を要求してきました。

僕のこんな姿までも、全部見られて、受け入れられて、愛されて…



そして、夜は彼女の気が済むまでセックスした後、
身を綺麗にされ、寝巻きを着せられ、
必ず毎晩、彼女の柔らかい胸に抱きしめられて寝かしつけられます。

「もっとちゃんと私の胸に抱きつきなさい。」

「うん…そう。」

「ちゃんと私の胸に子供が甘えるようにしっかりと抱きついて眠るの。」
「いい子ね。」

これが同棲生活が始まってからの、彼女との日常です。



彼女の部屋に一緒に住み始めて、
彼女が普段どんな生活を送っているのか、
知る事になりました。

彼女は普段、ウェブや電子書籍で
小説を書いて生計を立てているようです。

大学の学費も自分で払い、
親元から離れ、
完全に自立していました。

僕は週に二日、書店で
アルバイトをしていましたが、
大学に通う時間とアルバイトの時間以外は、
ずっと彼女の部屋のベッドに居て
過ごすようにと言われ、

彼女自身の書いた小説を読んだり、
彼女のおすすめの小説を読んで、
日々をおくっていました。



彼女はとても官能的な
純文学を書いています。

彼女の書く小説は、
とても性的に掻き立てられて…



読んでいると、
まるで彼女に愛撫されているかのような
気分になり…

ずっと股間の膨張がおさまりません…。

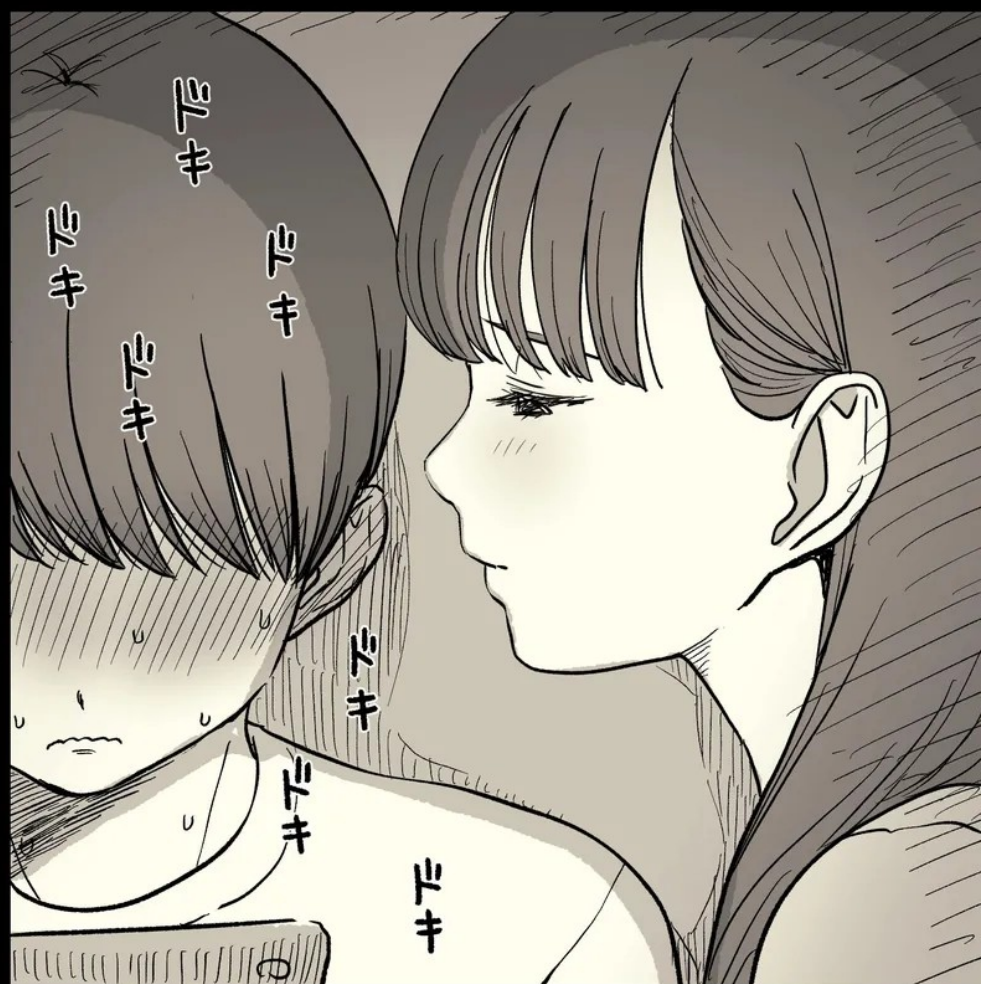


彼女は執筆中、時々一息ついて、

「どう…?」

「私の小説、面白かった…?」

と感想を聞きにきて…





彼女は、僕のズボンの中に手を入れ……

もろ……

あっ……
だ、だめっ……

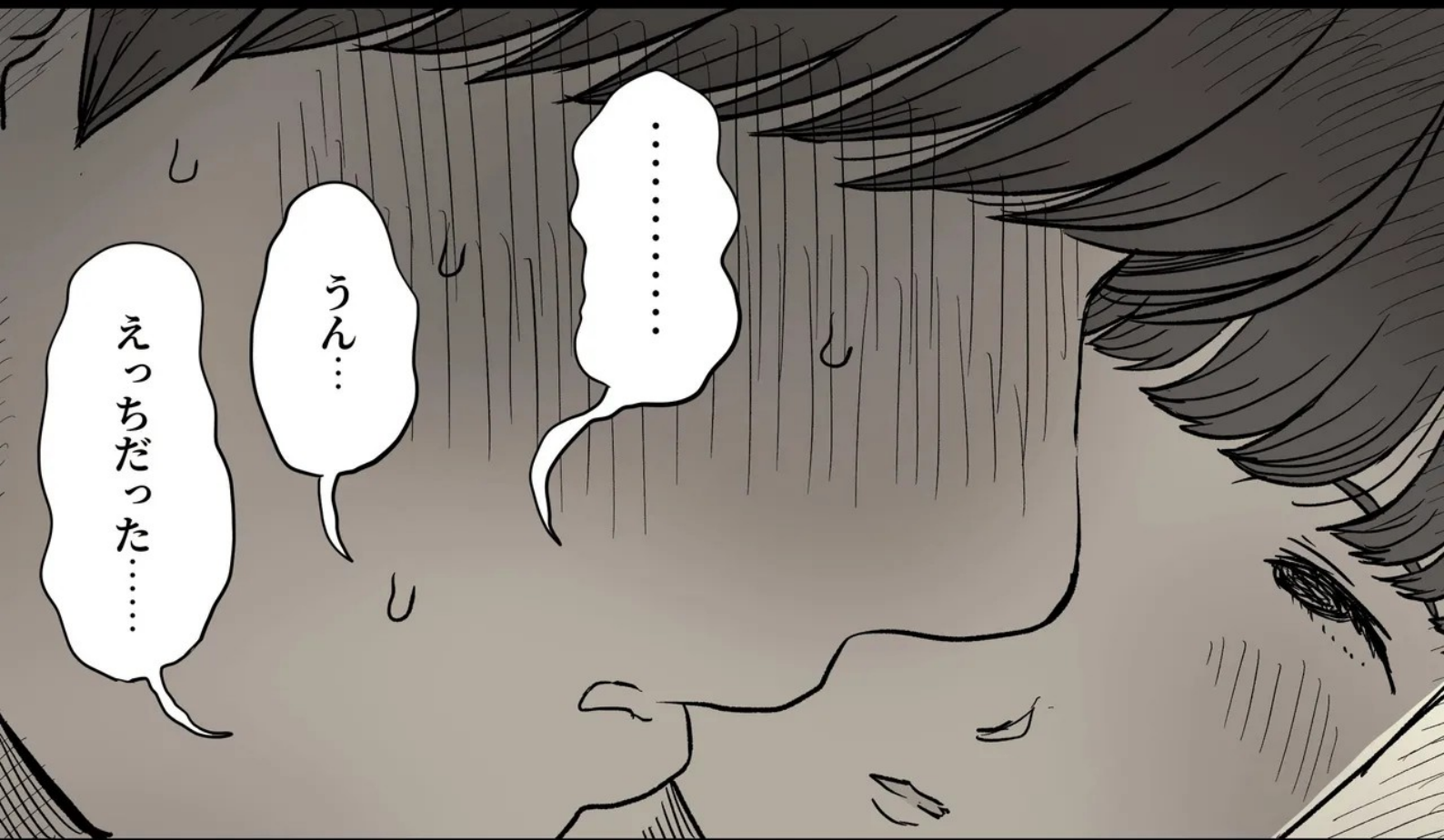
膨張して液を沢山滴らせてしまっている股間を
手に感じた彼女は、とても嬉しそうな顔をして……

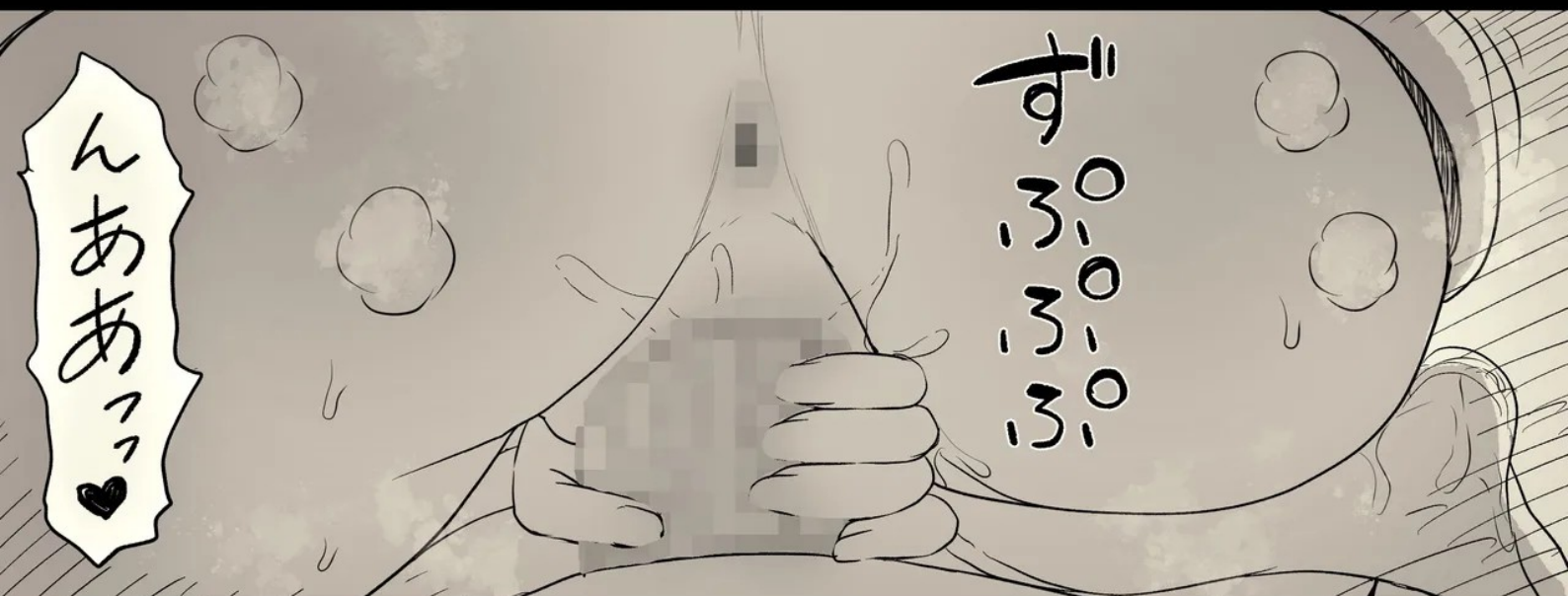
私の書いた
小説読んで……

興奮しちゃっ
たんだ……

えっち
だった……？

ねえ……
答えて……





たんたんたんたんたんたんたんたんたんたん

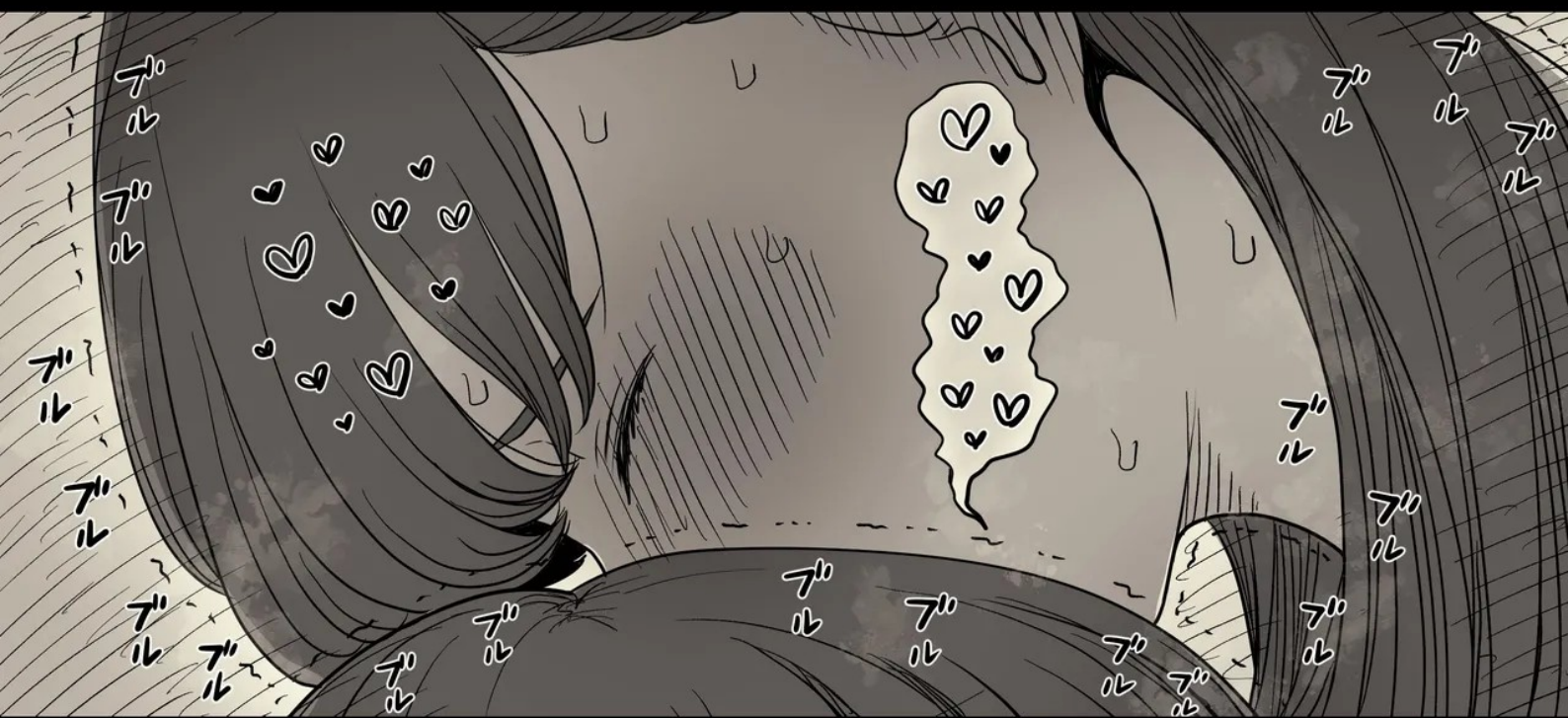
あああ
可愛いっ！
嬉しいっ！

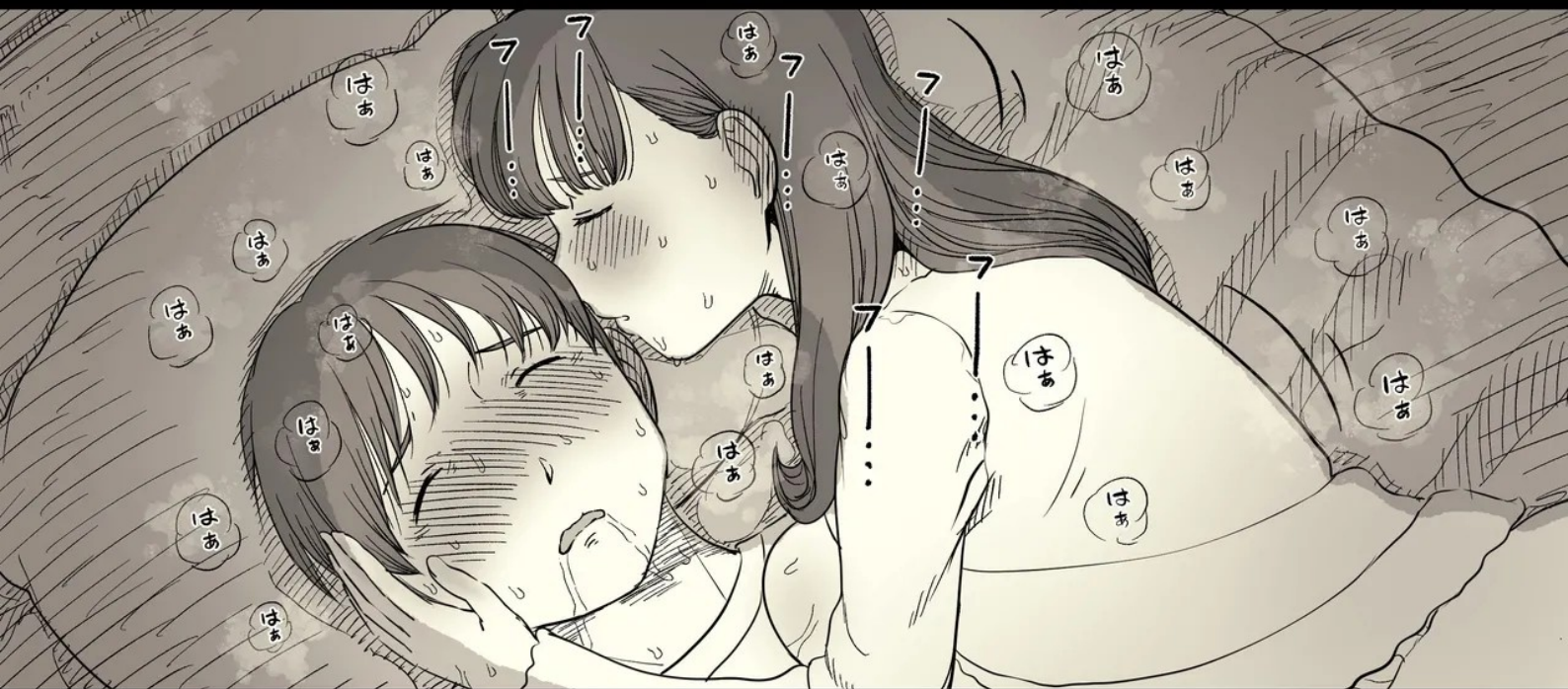
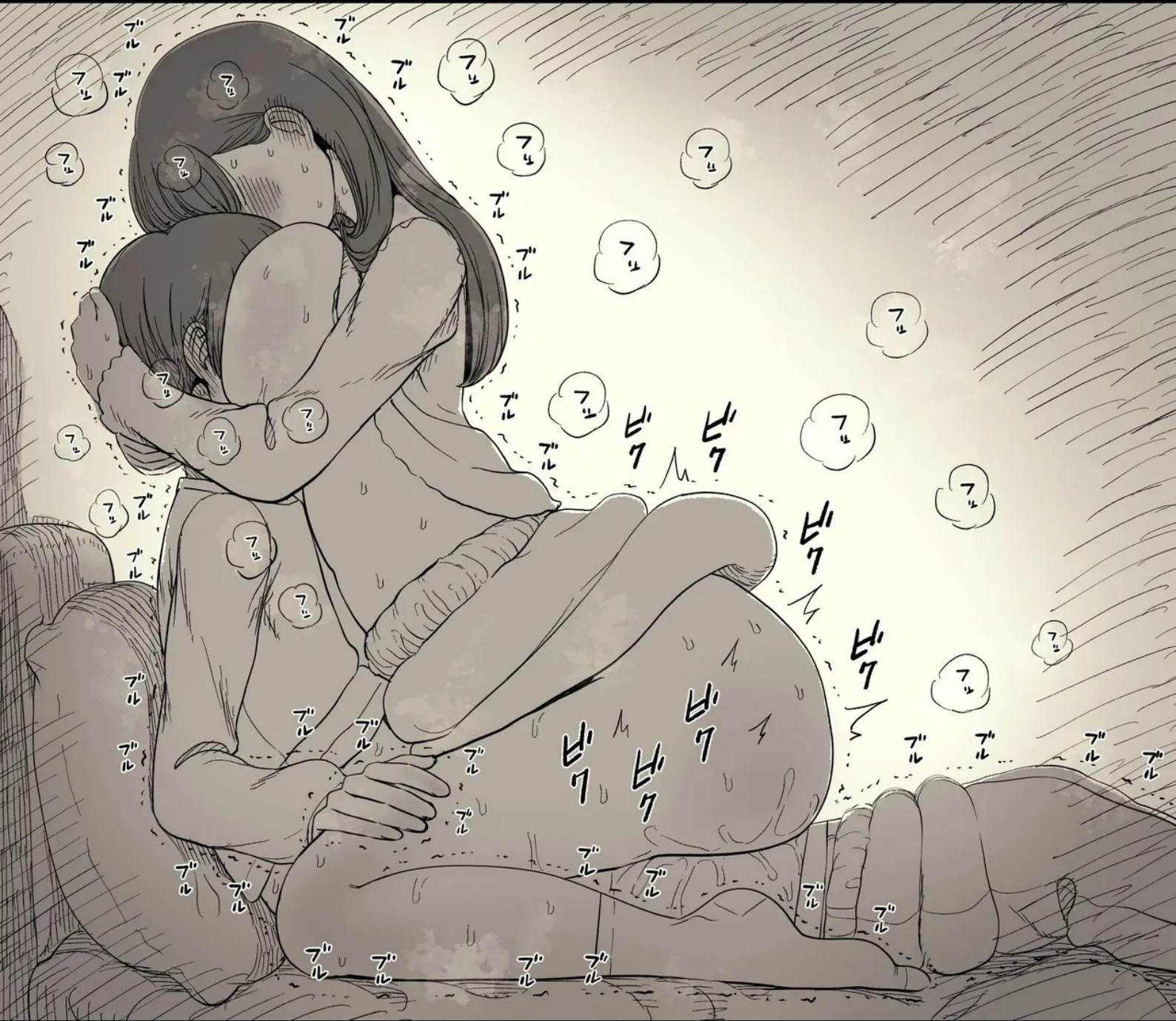
好きっ
好きっ
好きっ！

好きい！

ああああああああああああああああああああ







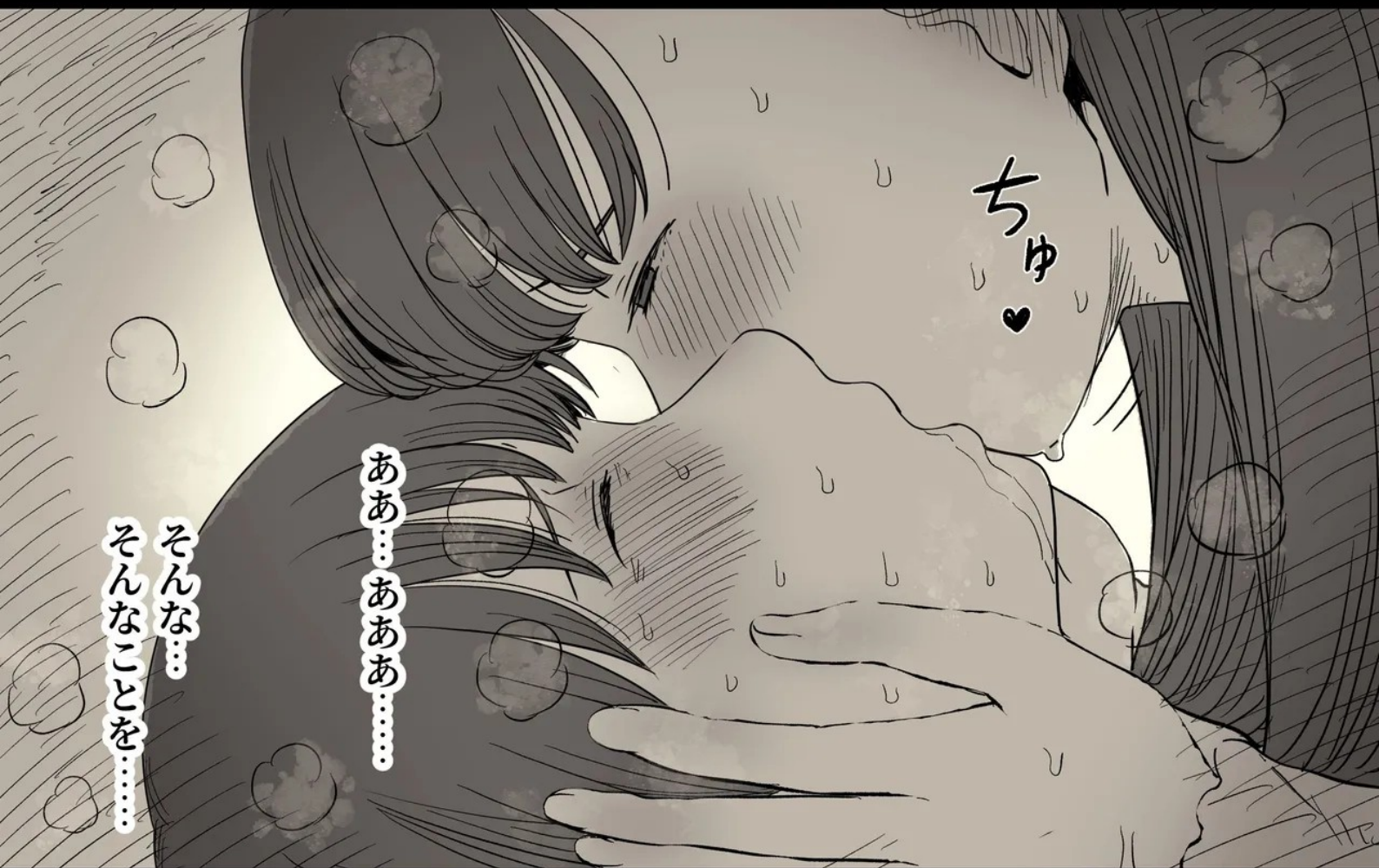
ねえ、次回作…

私達の事を
小説にして
書こうと思うの…

私たちの事を…
みんなに読んで
もらうのよ…？

想像してみて…？

すごく…
興奮する
でしょう…？



僕は彼女の言動でいつも頭も心も沸騰したように
熱っぽくさせられ続けて…

彼女のその蠱惑的な提案を否定する事もできず…

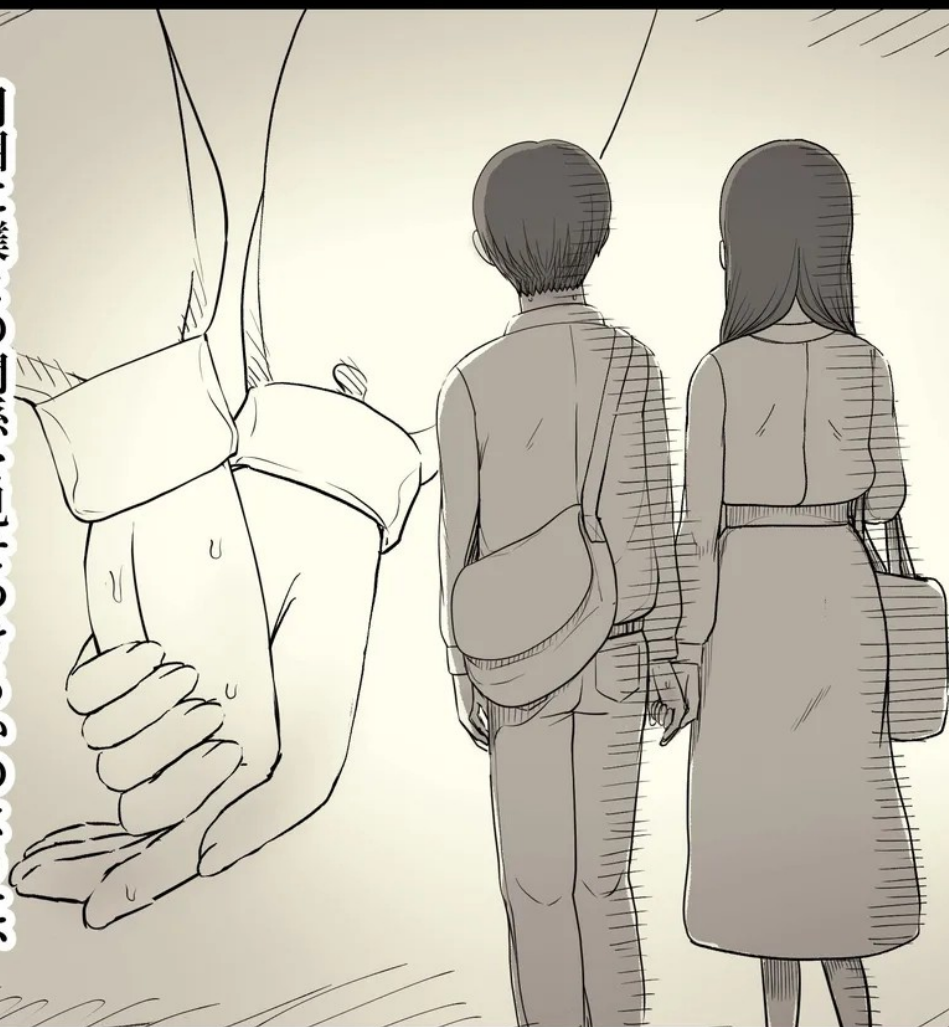
僕は……

彼女の深い愛に心地良く囚われた僕の人生は…

この先どんな事になってしまうのだろう……

彼女と一緒に暮らし始めてから、
彼女は全てに吹っ切れたのか、

今まで周囲に隠していた僕らの関係を、
大っぴらにするようになりました…。



周囲に僕との関係を見せつけるかのように、
私のモノだと主張するかのように、
平然と常に僕の手を握り外を歩き…



サークル室での席も常に隣にべったりと座り、
家から出てから帰宅するまで、
授業で離れ離れになる時間以外、
ずっと僕の手を握り続け、
自分の横に置き続けていました…。

周囲から横目でちらちらと注目され続ける
常に視線を感じるこの状況：

僕は周囲からの強い視線を大量に浴びて、
居心地の悪さを感じながらも、
堂々といつも通り無表情で過ごしている
彼女の支配下に置かれている事に、
僕は盲目的な感覚に陥り：



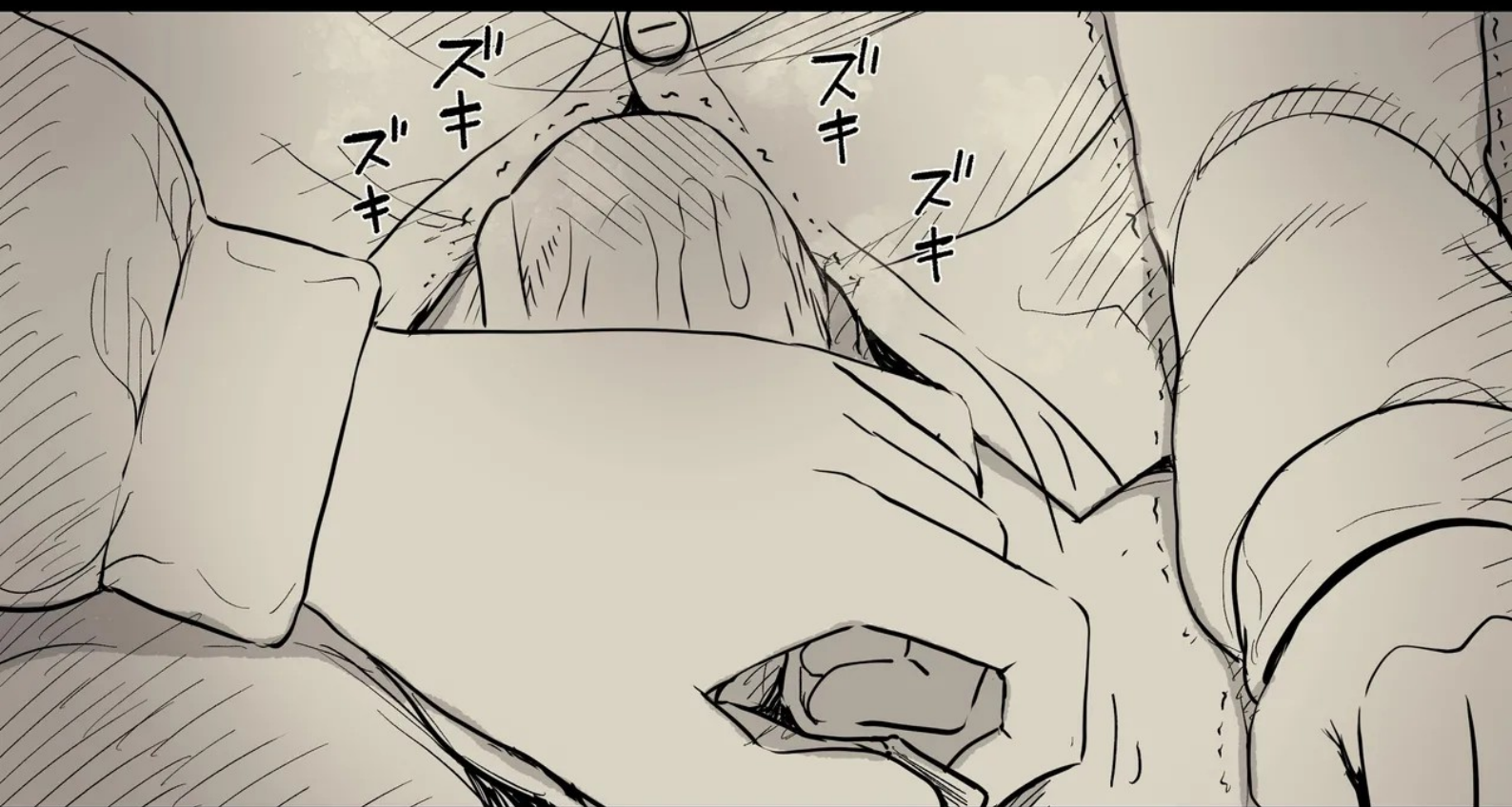
彼女の手の体温を感じ：
恥ずかしながら人前であるにも関わらず、
常に股間を硬くし続けてしまいました：
その事に悟られないよう、
膨張を隠す事に必死でした：

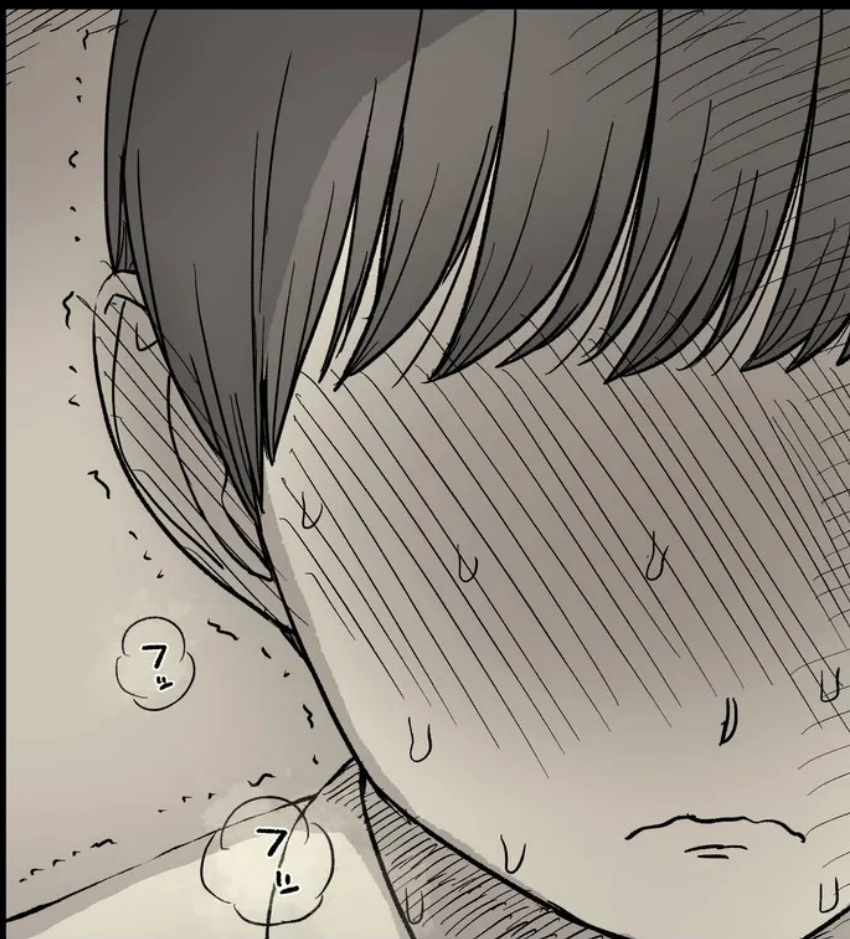
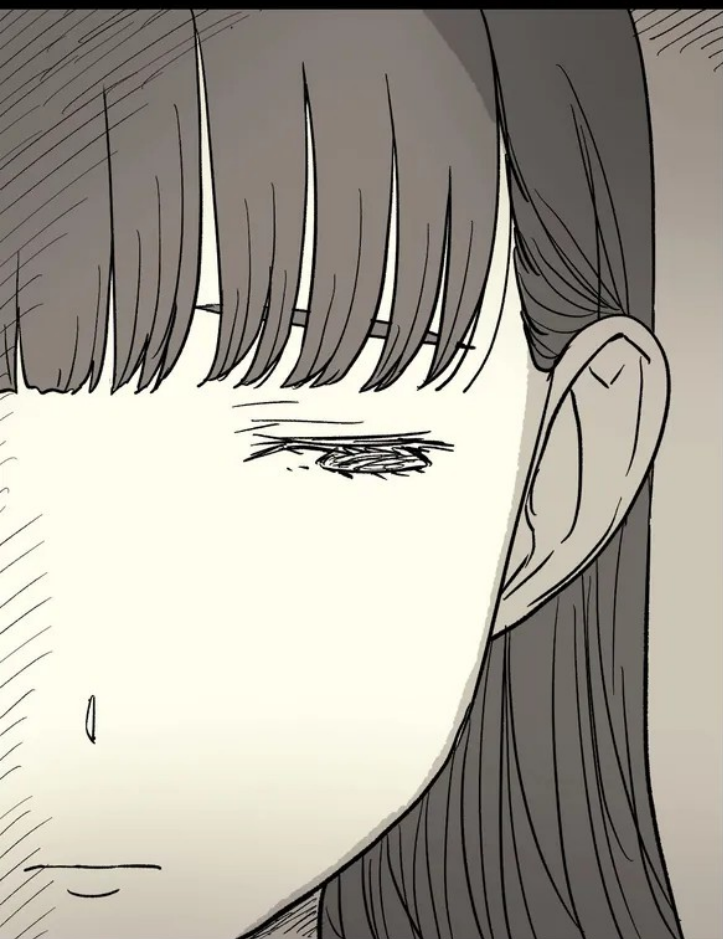


ギィ。。。

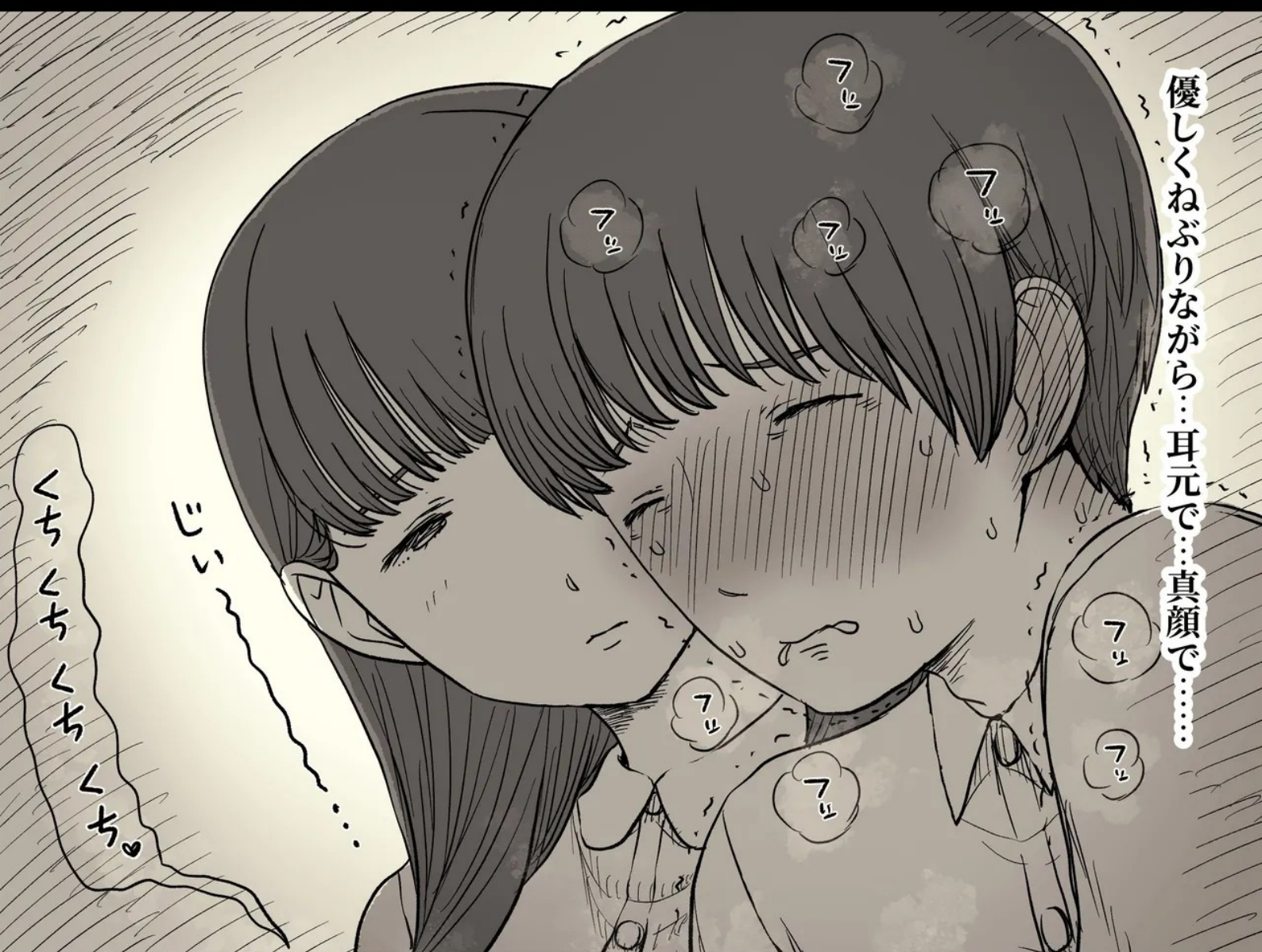
かちゃん。。。

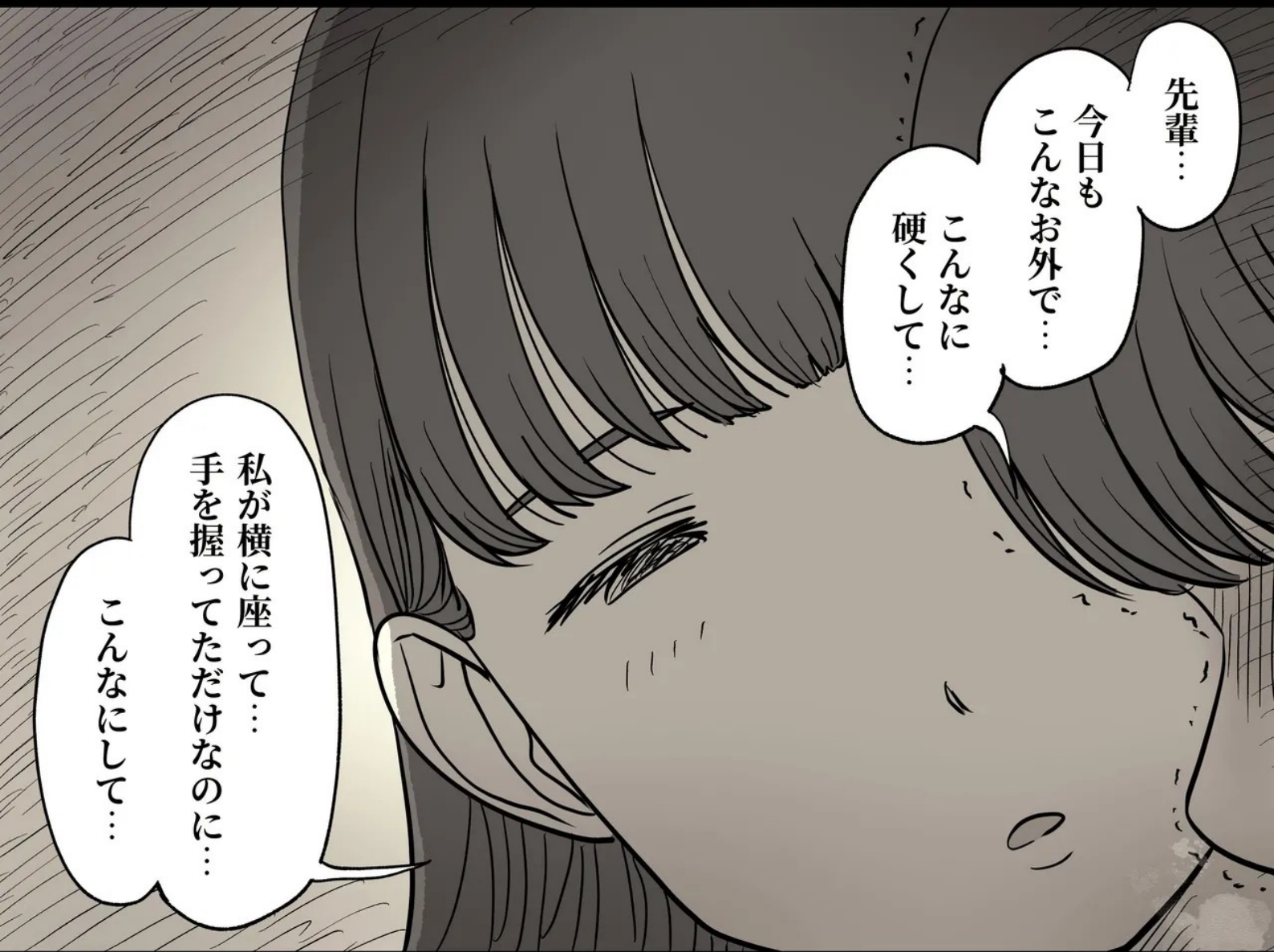
サークル室に僕達二人以外誰もいなくなると…
彼女はついに家だけでなく…
サークル室でも襲ってくるようになりました…





僕のカチカチになったモノを愛でるように
その白くて柔らかい手で
優しくねぶってくる彼女…







彼女は、僕が射精しそうになるのを見計らったように寸止めし…



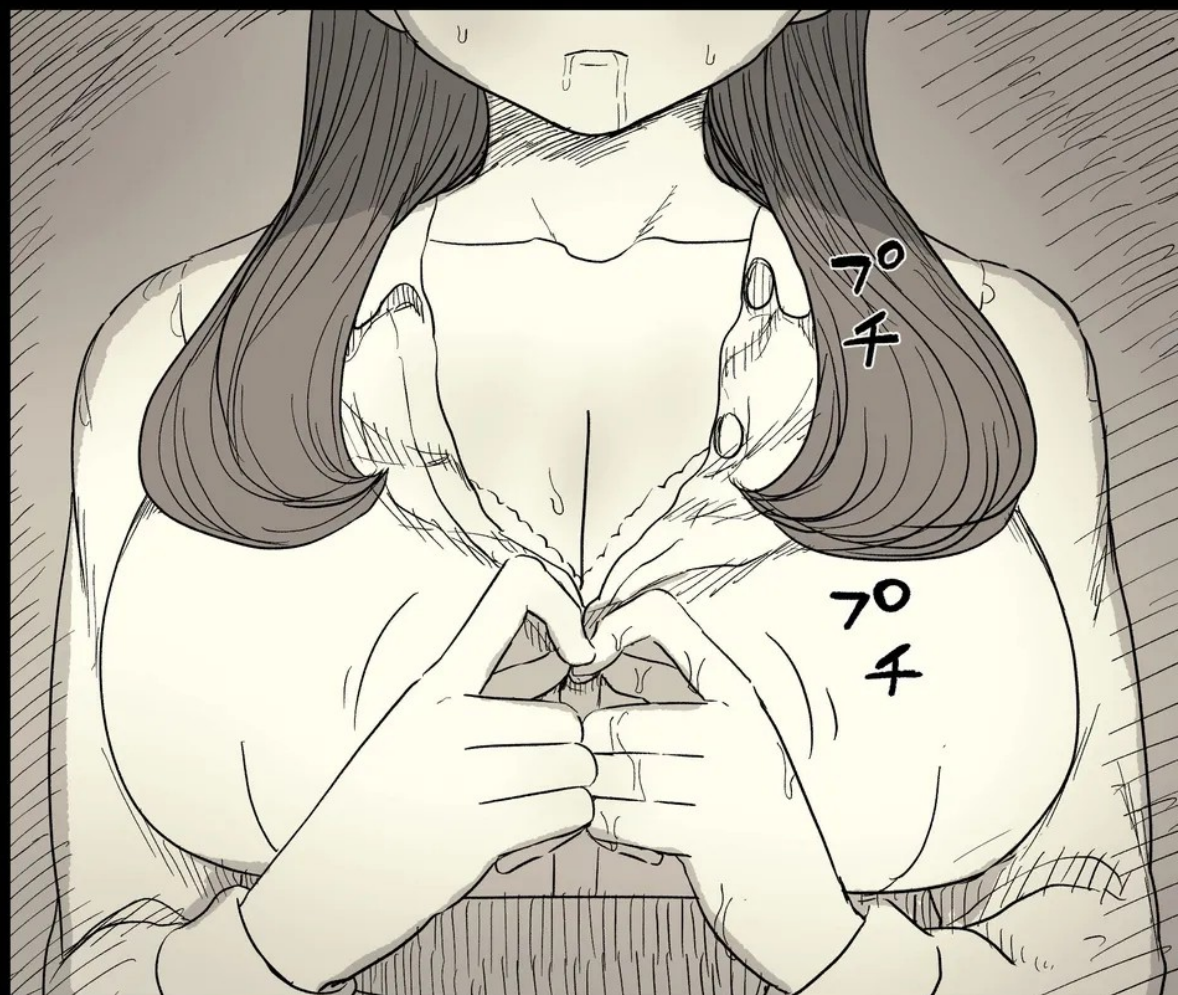
ス
.
.
.
.
.
.

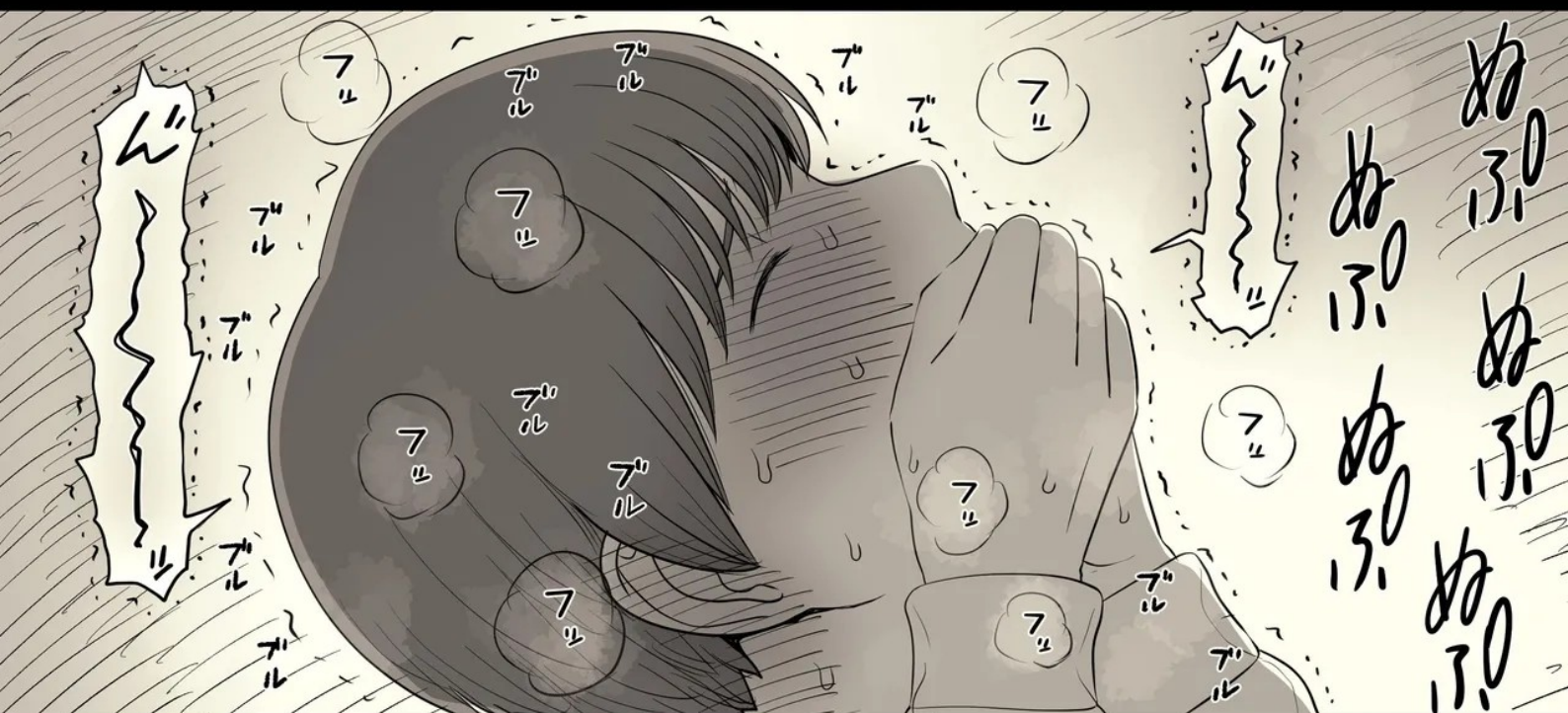
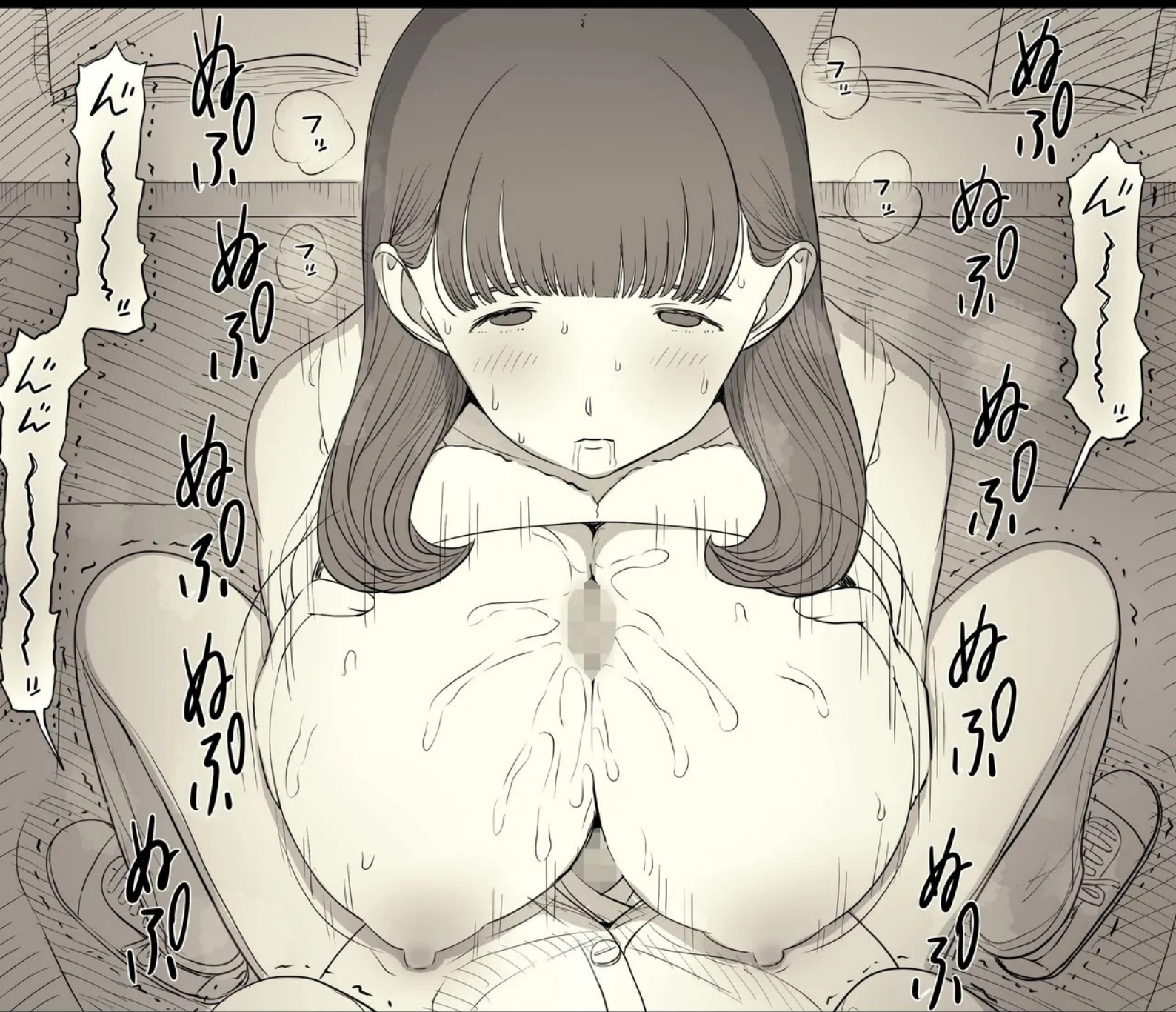
ス

.
.
.
.
.
.



だ、ダメっダメっ
人が来ちゃうよっ





そして、小二時間、僕を虐めているうちに
彼女も我慢できなくなったのか、
胸で僕のモノを責め立てる事をやめ……

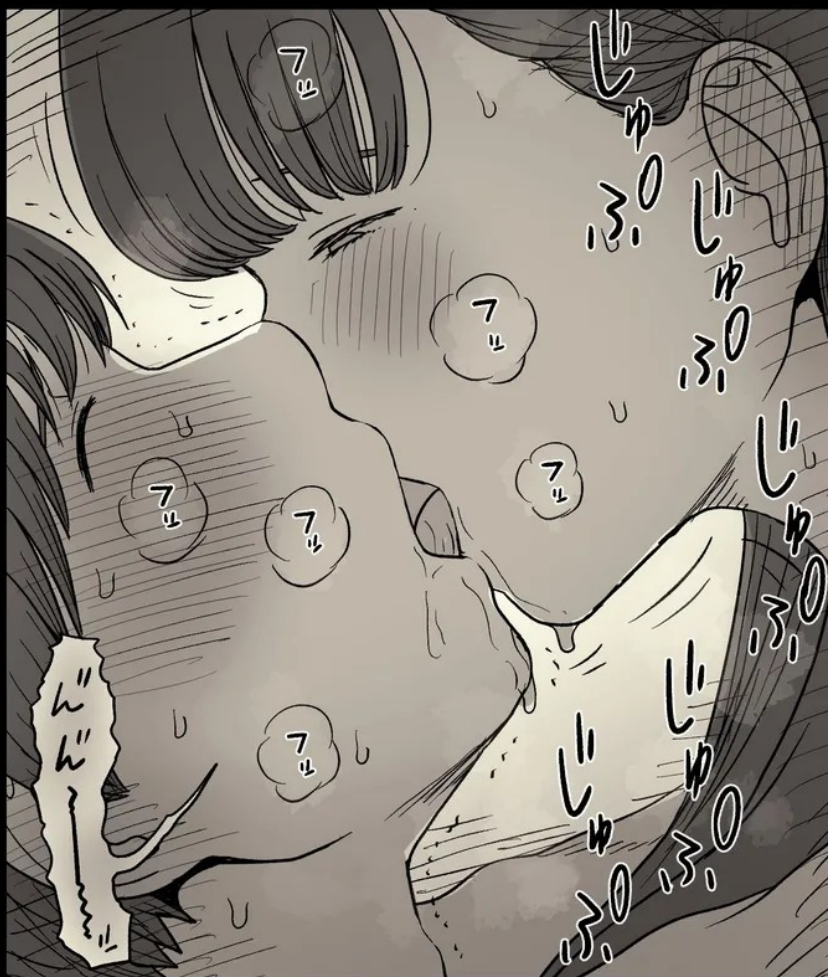
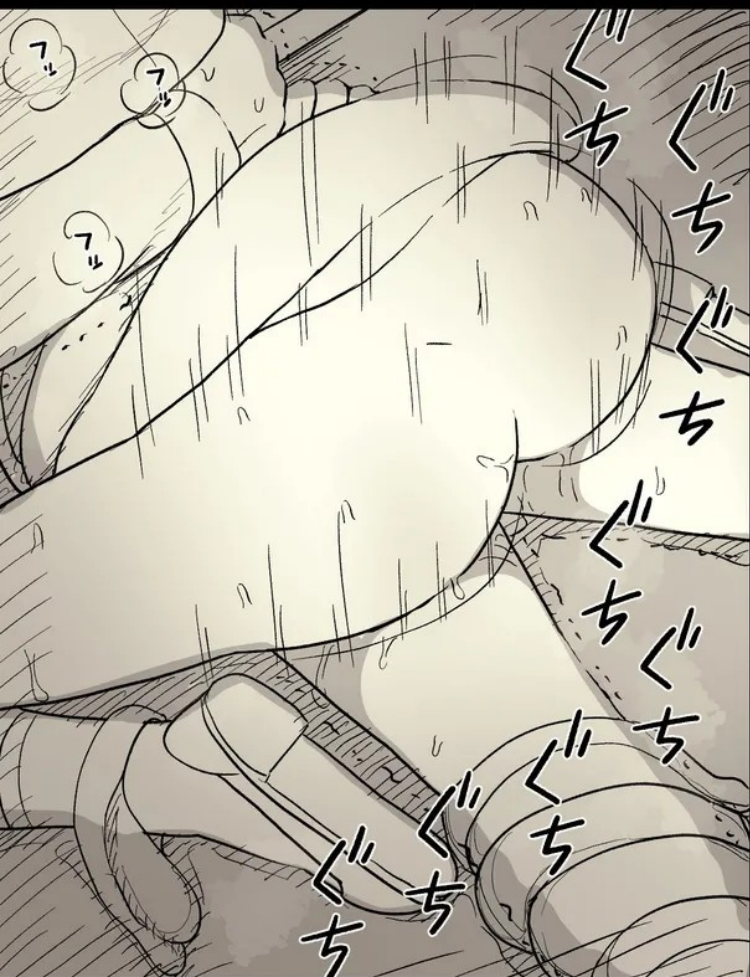
そろそろ
射精させてあげる…

私のナカに全部出さないと…

服を汚さないように…

お前が泣いてるのさ





何分…いや…何十分？一時間？

本に囲まれた狭い文学サークル室の隅で
彼女に濃密に襲われている最中、

サークルメンバーの二人が
戻ってきたような気配を感じました…



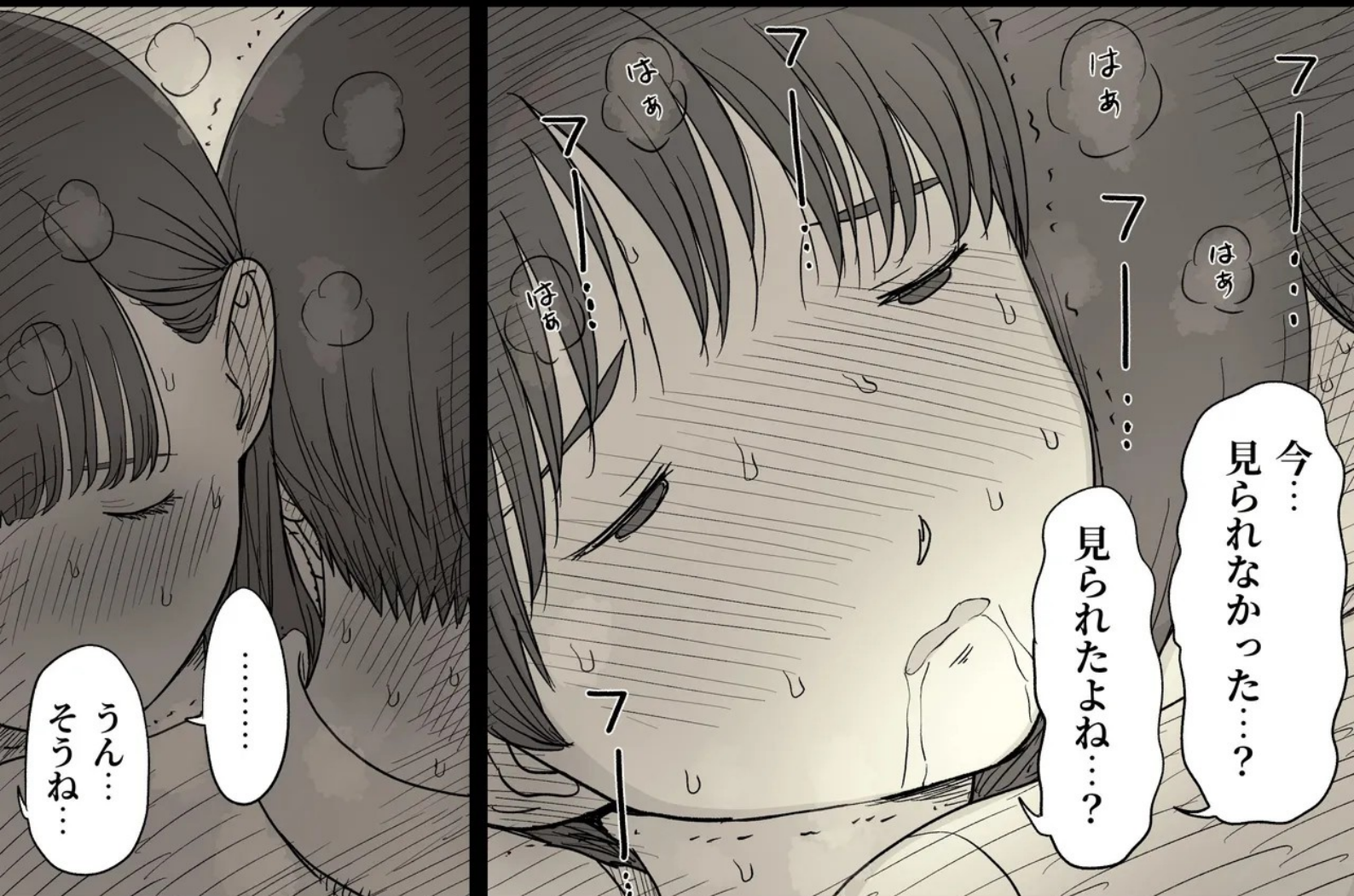
一瞬、ドアを開けて目撃されたような気がしましたが、
僕の頭は興奮に包まれ視野が狭くなり
三人の關係に没入し続けていて、思考が混濁し、
訳がわからなくなっていました…



彼女の膣内に射精し終わった頃、
少しだけ意識が戻り、
ドアの方に目をやりましたが、
ドアは閉まっていました…。



サークルメンバーはきつと
僕たち二人の行為に動揺して、
そのままそっと帰ってくれたんだと思います…。



今…
見られなかった…？

見られたよね…？

うん…
そうね…

見られたから、
どうだっていうの…？

もうみんな、
わかってるよ…

こんなに毎日、
私たちが
ベツタリなとこ、
見せつけて
きたんだから…

は、
恥ずかしいよ…

流石に…

ふふ♪
可愛い…

もっと
恥ずかしがってるとこ、
見せて？ ♡

カリリ♡

んあ♡

たんたんたんたんたん



また
ああ
ああ
ああ



続きは……

お家、帰りましょう……

フッ

フッ

フッ

フッ

フッ

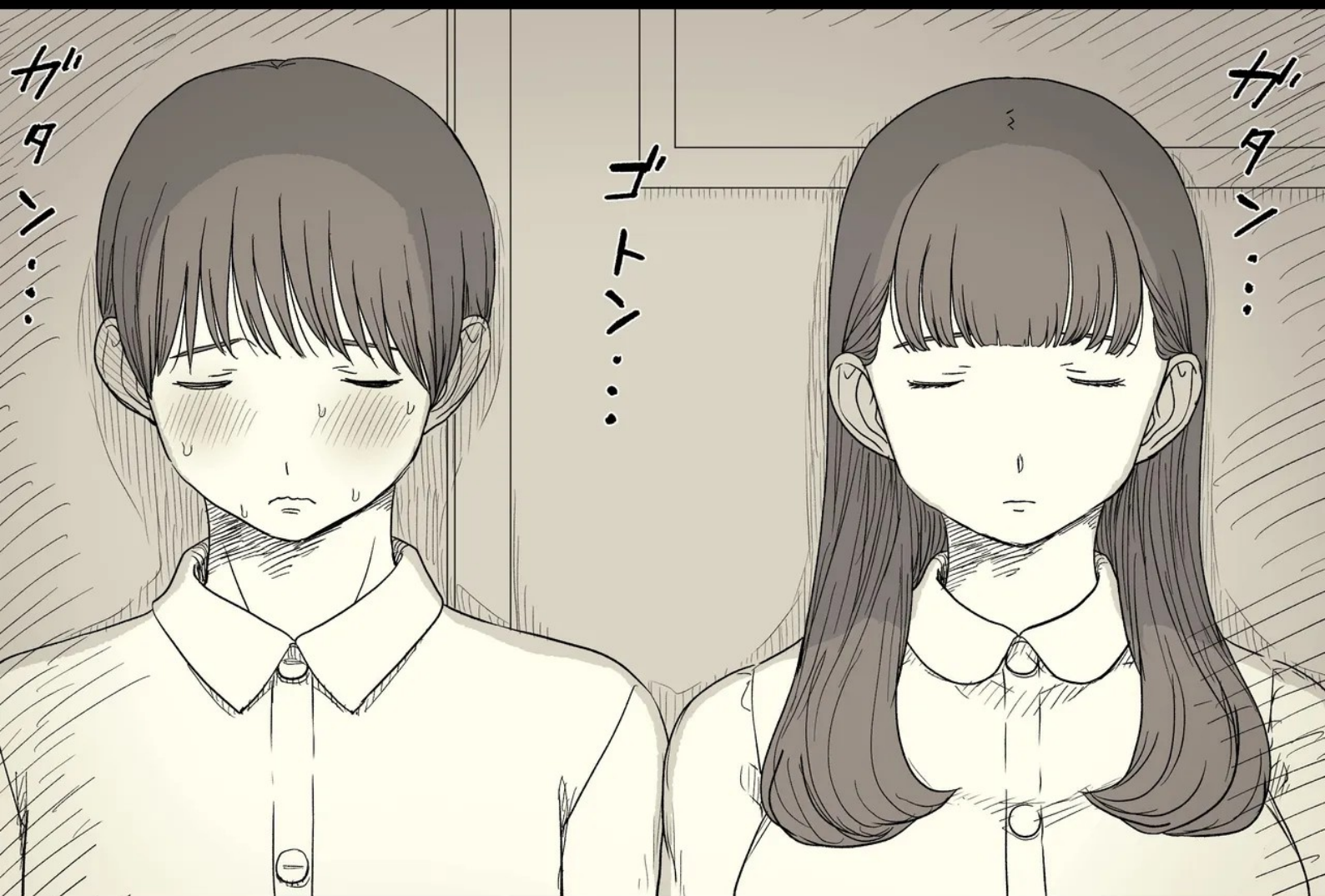
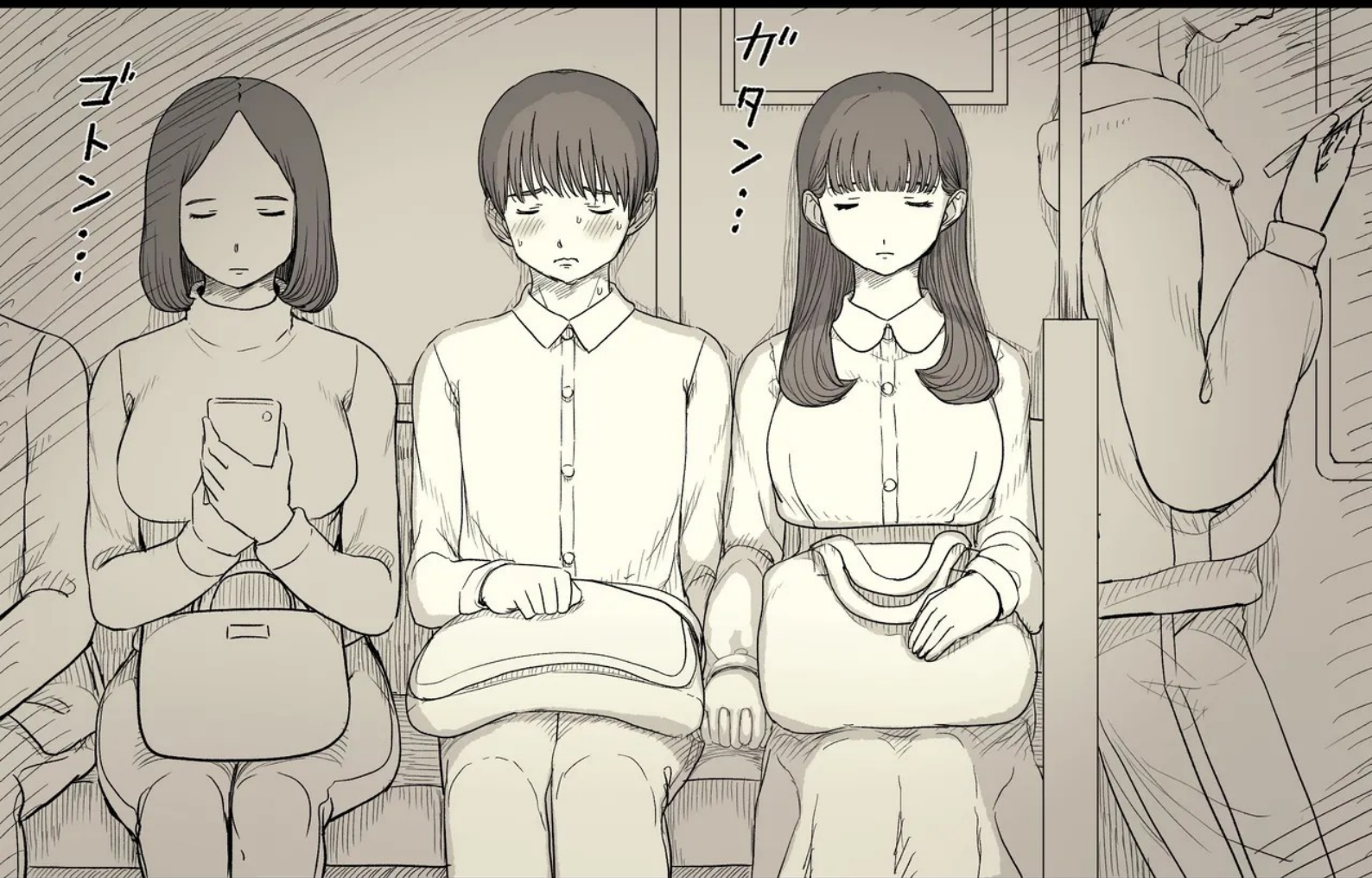
フッ

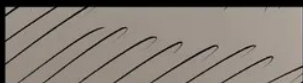
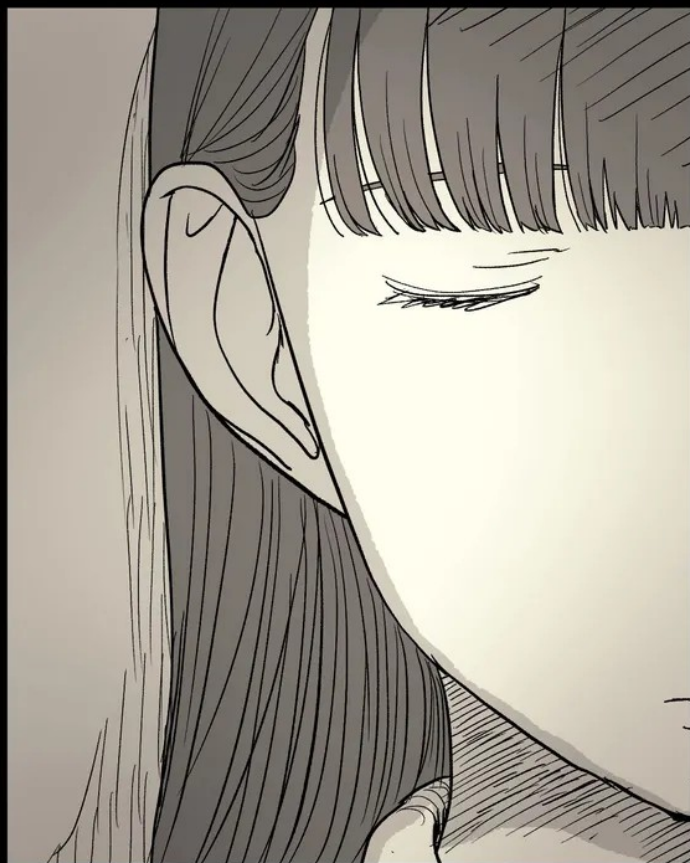
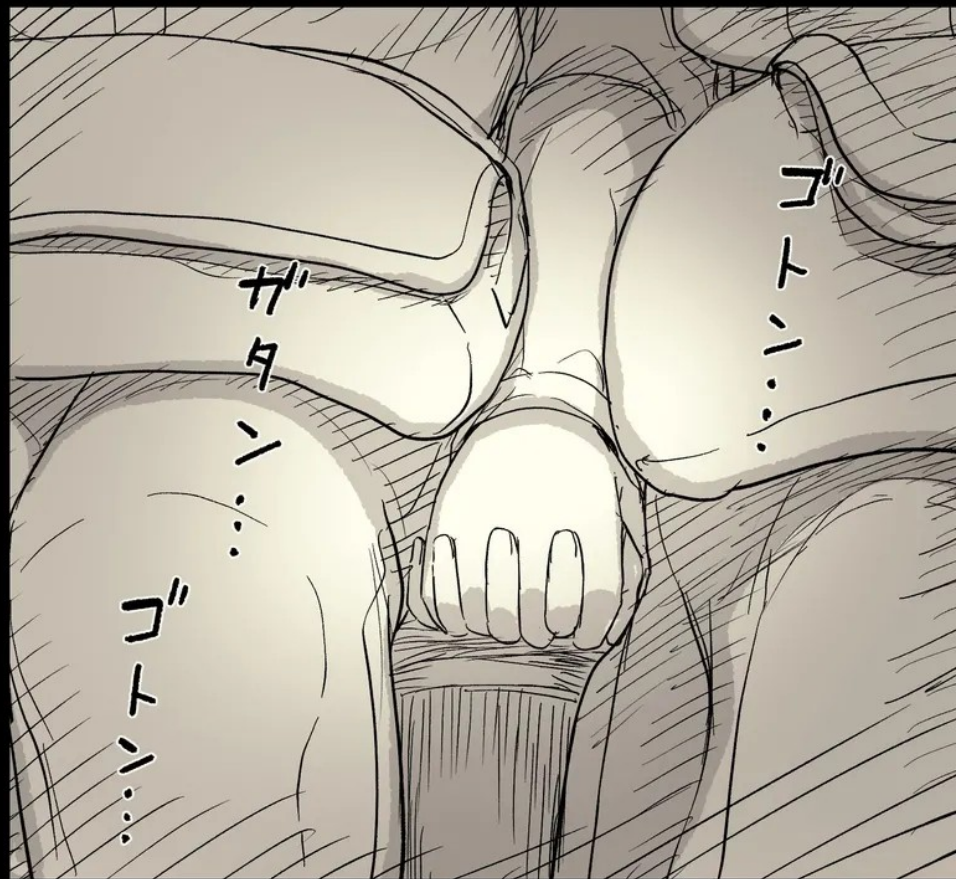
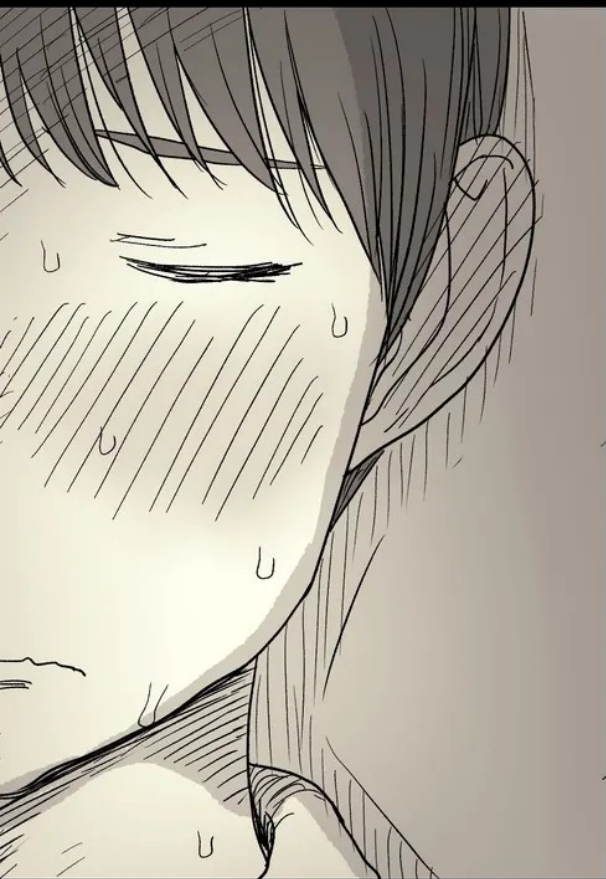
フッ

フッ

フッ

フッ





彼女は、あんなに帰り道や電車の中で
人前では無表情だったのに、
帰宅するなり我慢を爆発させ豹変しました……



彼女はいつものように嬉々として
自分の唾液で今から責めようとしている
僕のお尻をしっかりとほぐして濡らし……



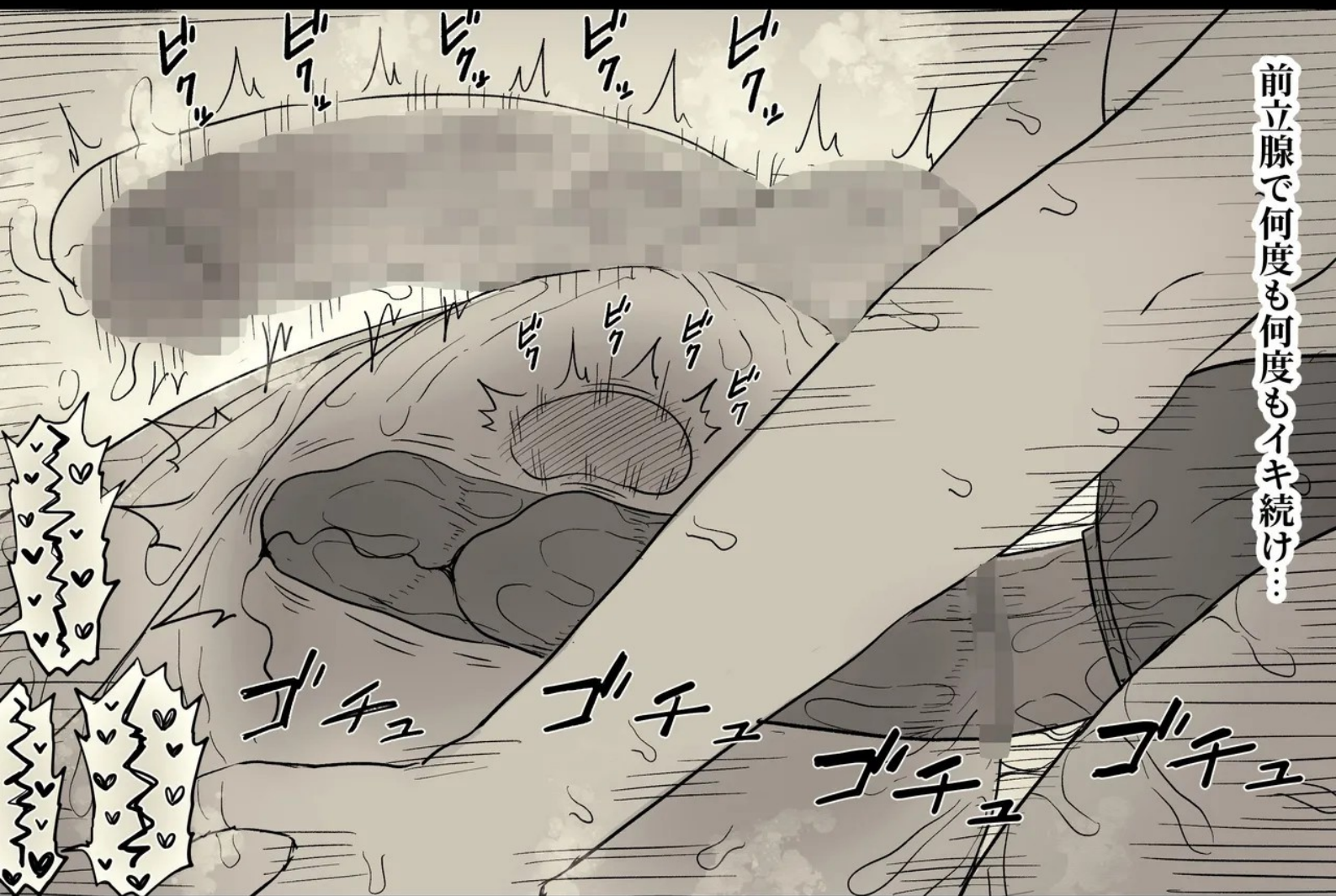
そして、僕の前立腺が火照りきった後、
彼女は欲望の赴くまま激しくペニスバンドでお尻を犯してきました…

「ねえ、これがして欲しかったんでしょ？」
「いっぱい犯してあげるっ！」
「いっぱい可愛い可愛がつてあげるっ！」
「お尻のおまんこでもイかせてあげるっ！」

今まで何度も何度もお尻を責められ、すっかり開発されてしまった僕は、
射精なしで何度もイくような雌の体になってしまいました…



前立腺で何度も何度もイキ続け：



僕が散々ドライオーガズムでいった後、
彼女は頃合いを見計らって
その綺麗で細長い手でも激しく僕の陰茎をしごき…

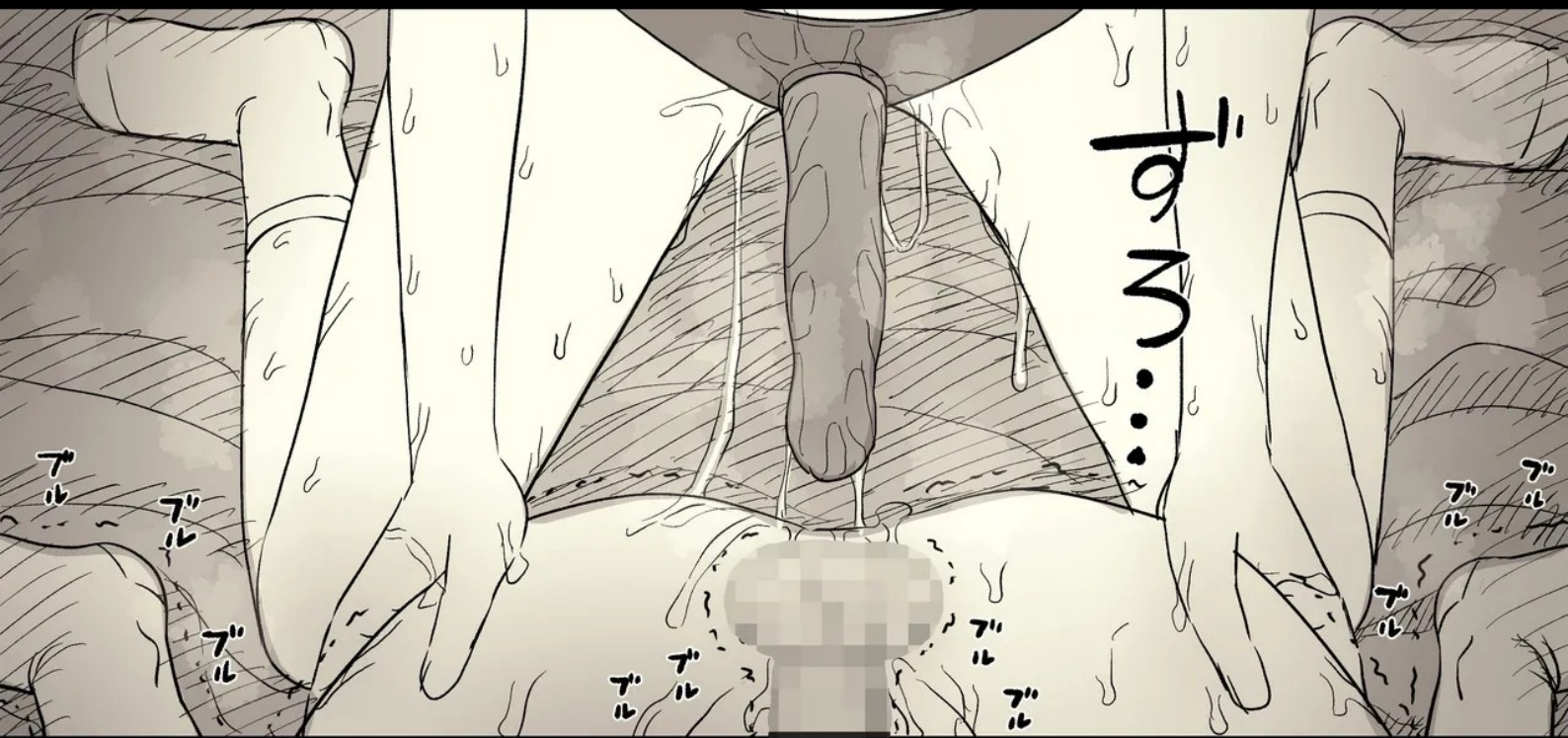
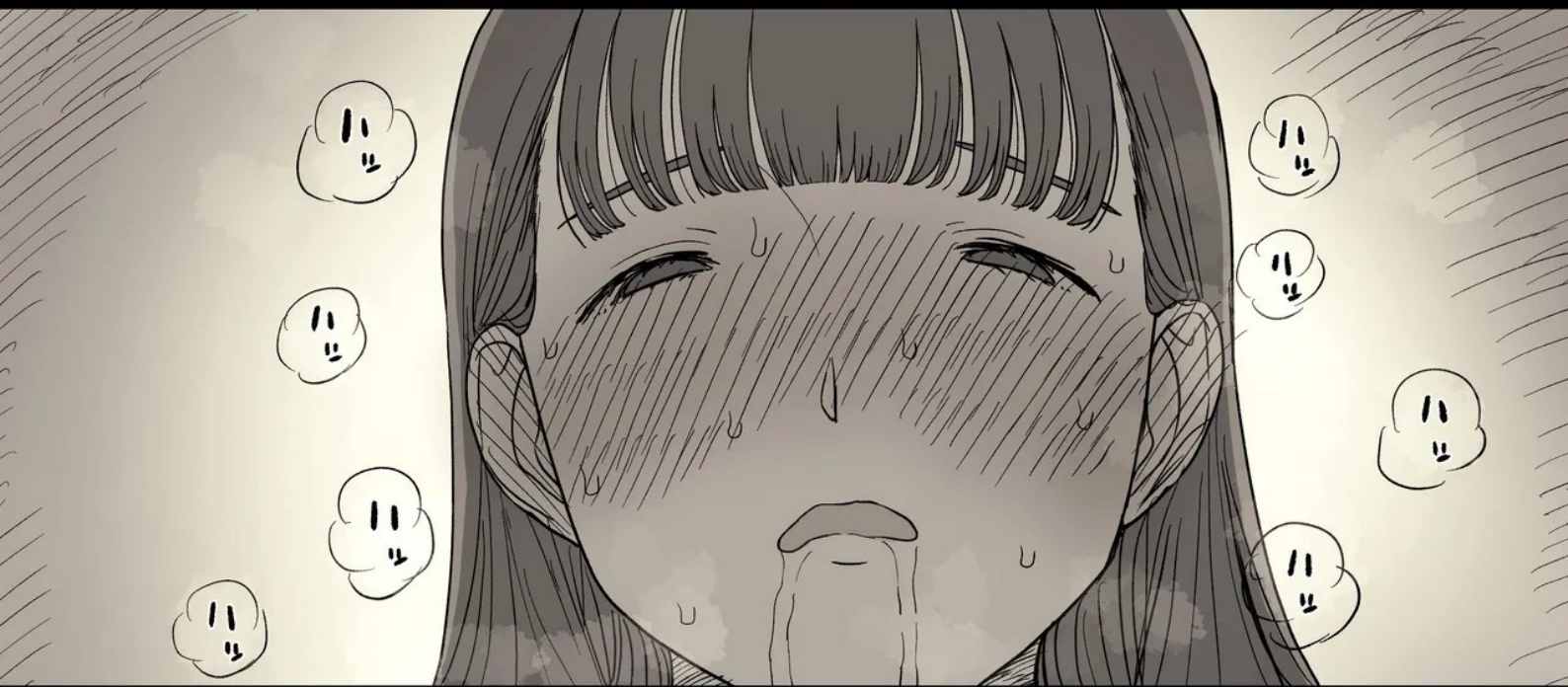
たんたんたんたんたん

ぐちぐちぐちぐちぐちぐち

溜まりに溜まった精子を全て
吐き出させるように大量射精させます…

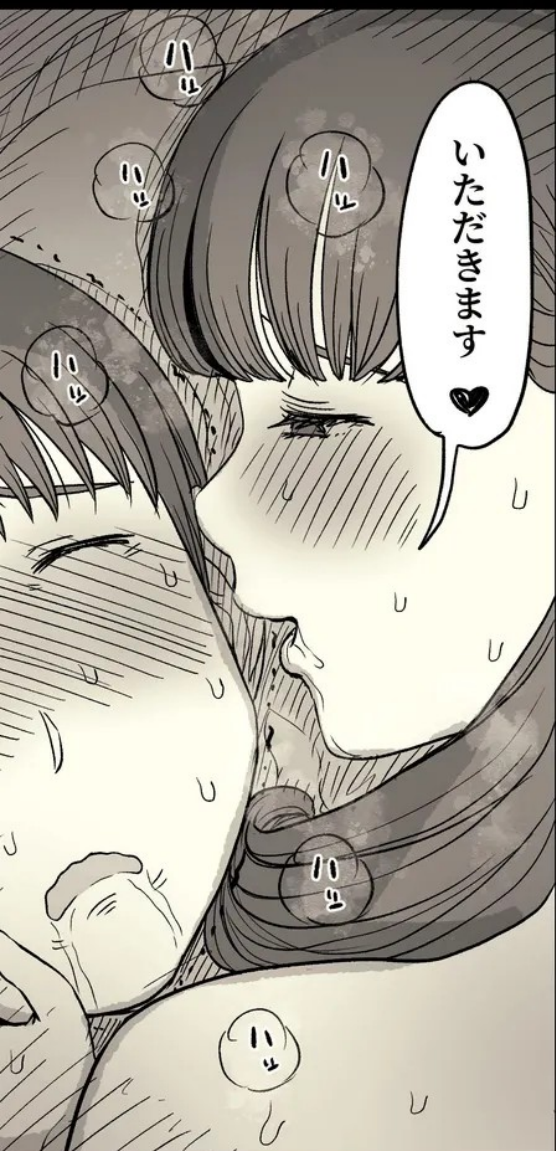
雌の僕も雄の僕も両方解放させてくれる彼女…
ああ、なんて愛情深いのだろう…

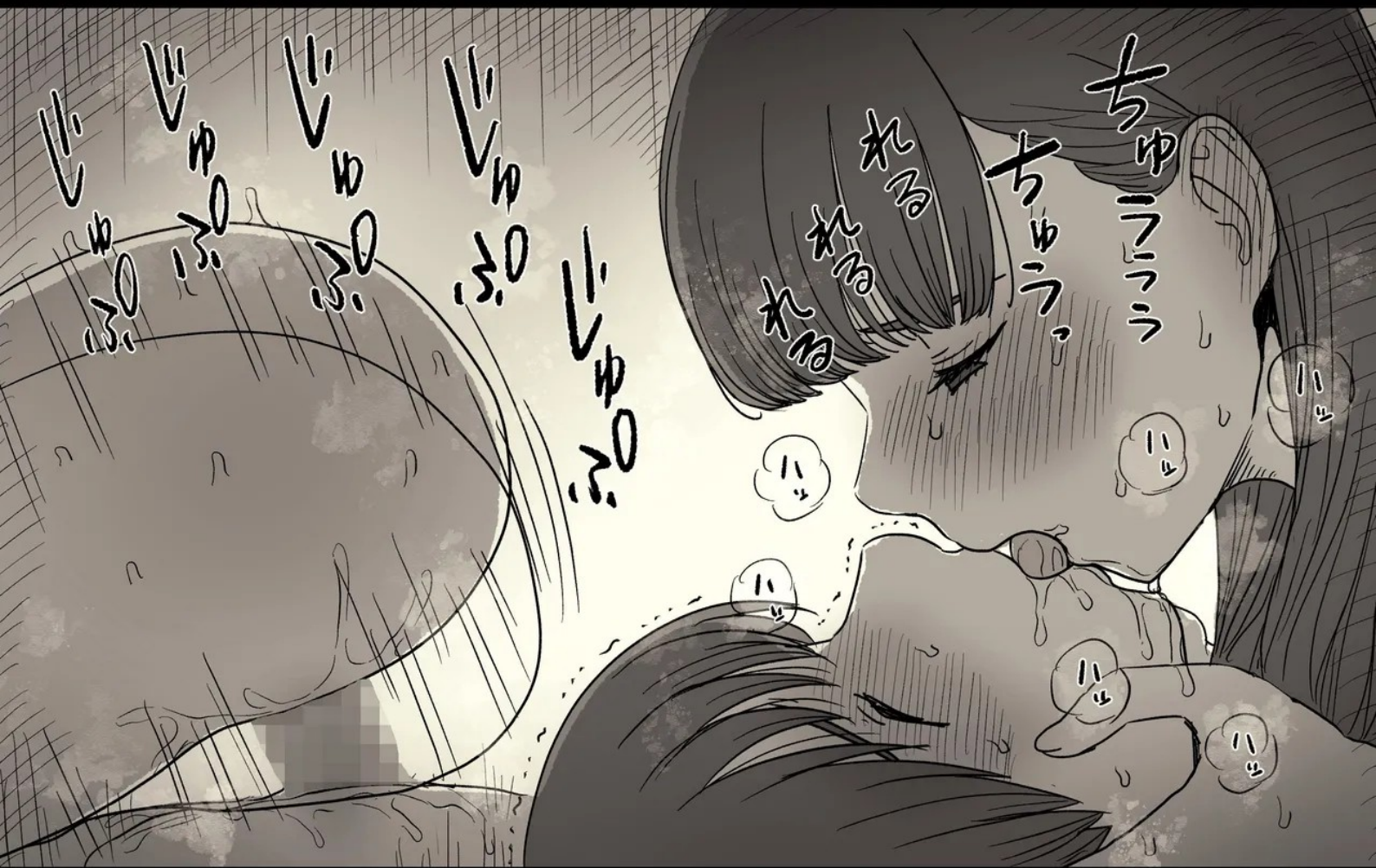




彼女はいつものように、
僕の撒き散らした精子を全て、
美味しそうに、いとおしそうに、
舐め取って全部飲み尽くします…





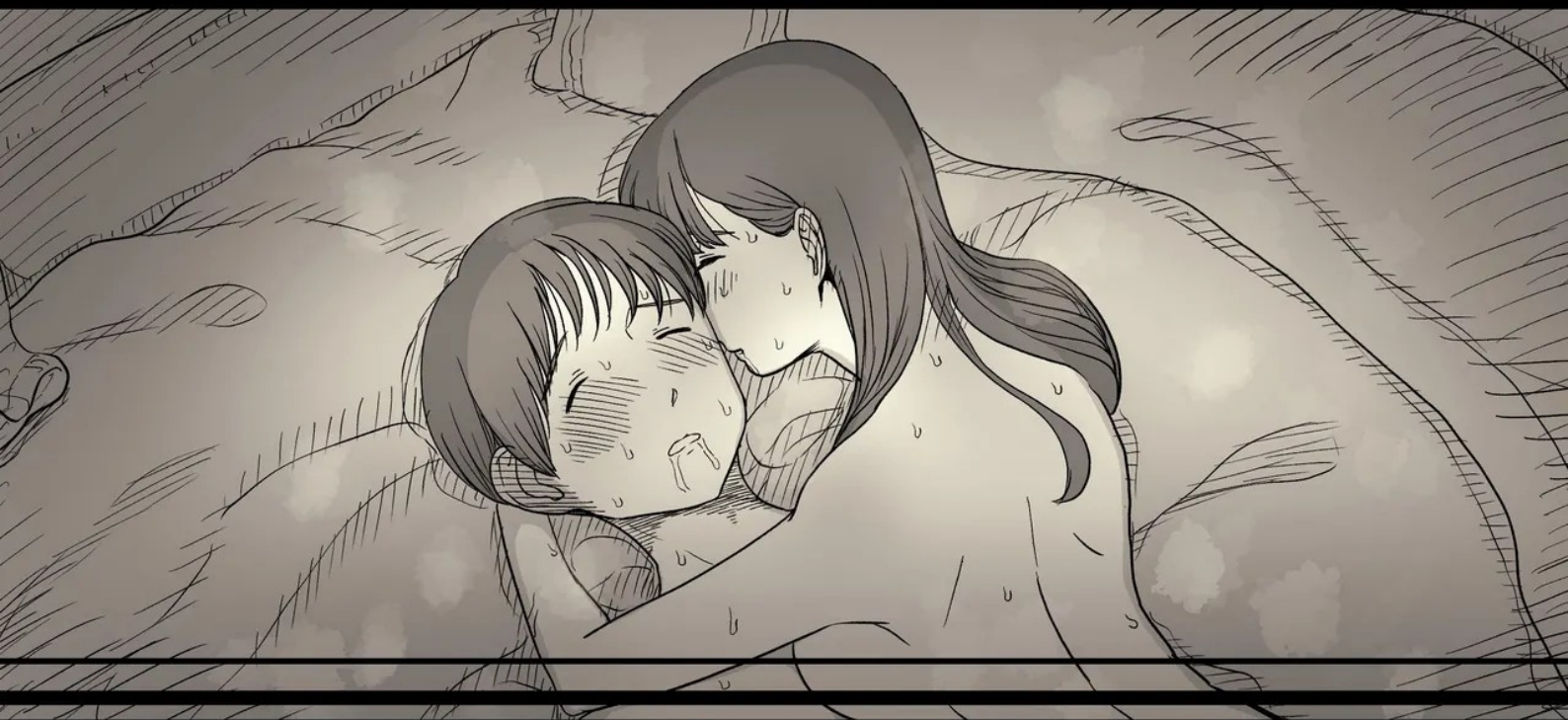












僕達二人だけの部屋の…この二人だけの空間で…

二人だけの世界に完全に入り込み…

性と愛でぐちゃぐちゃに混ざり合った同棲生活……

この頃には僕の体はもう、すっかり開発されきって、彼女に激しく犯される事に慣れ切っていました…。

彼女も付き合いたての頃のような丁寧な責めセックスの時期は過ぎ去り、欲望を叩きつけるようなセックスをするようになっていました…。

付き合いたての頃の、童貞だった頃の僕は感度が極限まで高く、触られるだけでイキそうだったくらいに敏感だった時期は過ぎ去った代わりに、今は二人の心も体もべったりとくっつき溶け合いすぎていて、

欲望のままに激しく泥のようにむさぼるセックスに変わり、セックスの一体感がどんどん増していきました…。

あの頃のように拘束具など使わずとも、

既に僕は彼女に完全な信頼と安心を基に心の底から拘束されきっていて、僕は彼女の思うがままのモノになっているのです…。

この二人だけの世界……

どんどん二人が一体化して溶けていく感覚……

二人で一緒にどこまでも盲目的になって……

次回完結

文学女子に食べられる 5

サークル： ひまわりのたね
作： 種乃なかみ

2025/01/03

X (旧Twitter) : <https://twitter.com/3hsensei>
pixiv : <https://www.pixiv.net/users/12823252>